



始



325
188

仰信の驗實
——
著英芳瀬管



帝國の信託

菅瀨芳英著

大正
2. 9. 5
内交

序

菅瀨芳英誌

二
赤裸々な内心の暴露、懸値の無い發露懺悔、どうしても遁れることの出来ない死の問題、そこに宗教の眞意義は存するのである。如來の本願はその爲めに起り、如來の慈光はこゝに徹照するのである。觀無量壽經に説かれてある王舎城の悲劇は、人生上の一大事實であつて、誰しも一度は此の運命に襲はれねばならぬのである。今、親しく觀無量壽經を讀んで行くやうな實事に遇ふて、切實に味はして戴いた、此の實驗談を紹介するに當つて、先づ觀無量壽經の一節を引いて序文にかへやうと思ふ。而して、觀無量壽經に據つて、極惡深重、五逆十惡の大罪人であつたま、自己の價値に氣附いた者は、必ずや大無量壽經の、如來の大悲衆生の往生を誓ひました本願を瞻仰せねばならぬやうになつて來るので

ある。依て次に大無量壽經の一節を引くのである。

爾時王舎大城に一の太子あり。阿闍世と名く。調達惡友の教に隨順して、父の王頻婆娑羅を收執し幽閉して七重の室内に置き、諸の群臣を制して一も行かざるを得ざらしむ。

時に阿闍世、守門の者に問ひぬ、父の王今猶ほ存在せりやと時に守門の人白して言さく、大王國の大夫、身に鈔蜜を塗り環珞に漿を盛り、持用て王に上む。沙門の目連及び富樓那は、空より來りて王の爲に法を説く、禁制すべからず。時に阿闍世此語を聞き已りて、其母を怒りて曰く、我母は是れ賊なり。賊と伴たり。沙門は惡人なり。幻惑咒術を以て此惡王をして多日死せざらしむと、即ち利劍を執りて其母を害せんと欲す。

時に章提希、幽閉せられ已つて愁憂惟悴す。遙かに耆闍崛山に向ひて、佛の爲に禮を作して是言を作す。如來世尊在昔の時は、恒に阿難を遣して來らしめて我を慰め給ひき。我今愁憂す世尊は威重にして、見たてまつることを得るに由なし。願くば目連尊者阿難を遣して我が與めに相見せしめ給へき、是語を作し已つて、悲泣雨涙して遙かに佛に向ひ禮したてまつる。

時に章提希、佛世尊を見たてまつりて、自ら璽路を絶ち、身を擧げて地に投げ、號泣して佛に向つて白して言さく、世尊我れ宿し何の罪ありてか此の惡子を生み、世尊復た何等の因縁ありてか提婆達多と共に眷屬たるや。唯だ願はくば世尊我が爲に廣く憂惱なき處を説きたまへ我れ當に往生すべし。閻浮提の濁惡世をば樂ばす。此濁惡の所には地

獄餓飢畜生盈滿して不善の聚多し。願はくば我れ未來に、惡聲を聞かず惡入を見じ。今世尊に向つて五體を地に投げて求哀懺悔す。唯だ願はくば、佛日我に清淨の業所を觀せ教めたまへ。

爾時世尊、章提希に告げたまはく、汝今知れりや不や。阿彌陀佛此を去ること遠からず。汝當に繫念して諦かに彼國の淨業成したまへる者を觀すべし。我今汝が爲に廣く衆の譬を説かん亦た未來世の一切凡夫の、淨業を修せんを欲はん者をして、西方極樂國土に生ずることを得しめん。彼國に生れんを欲はん者は、當に三福を修すべし。一には父母に孝養し、師長に奉侍し慈心にして殺さず、十善業を修す。二には三歸を受持し、衆戒を具足して威儀を犯さず、三には菩提心を發し深く因果を信じ、大乘を讀誦し行者を勸進す、此の如きの三事を名け

て淨業とす。佛掌提希に告げたまはく、汝今知れりや不いなや、此三種の業は、過去未來現在の三世諸佛の淨業の正因なり。

佛掌提希に告げたまはく、下品下生さは或は衆生有つて、不善の業たる五逆十惡を造りて諸の不善を具す。此の如きの愚人惡業を以ての故に、應に惡道に墮し、多劫を經歷して苦を受くること窮り無からん此の如きの愚人命終る時に臨んで、善知識の種々に安慰して、爲に妙法を説き、教へて佛を念ぜしむるに遇はん。此人苦に逼られて佛を念するに違あらず。善友告げて言く、汝若し念ずること能はずんば、應に無量壽佛を稱すべし。是の如く至心に聲をして絶えざらしめ、十念を具足して南無阿彌陀佛を稱せしむ。佛名を稱するが故に、念々の中に於て八十億劫の生死の罪を除く、命終の時金蓮華を見る。猶し日輪

の如くして其人の前に住するを見、一念の頃の如くに即ち極樂世界に往生することを得。

「觀無量壽經」

設ひ我れ佛を得たらんに、十方の衆生、至心に信樂して我國に生れんと欲し乃至十念せんに、若し生れずば正覺を取らじ。唯だ五逆と、正法を誹謗するをば除く。

佛阿難に告げたまはく、其れ衆生あつて彼國に生るゝものは皆悉く正定の聚に住す。所以は何ぞ、彼の佛國の中には諸の邪定聚及び不定聚無ければなり、十方恒沙の諸佛如來は、皆共に無量壽佛の威神功德の不可思議なるを讚嘆したまふ、諸有の衆生その名號を聞いて信心歡喜し乃至一念せんに至心に廻向したまへり。彼國に生ぜんを願すれば即ち往生を得て不退轉に住す唯だ五逆と正法を誹謗せんをば除く。

八

著者誌

大正二年

「大無量壽經」

實驗の信仰

目次

目次

- 一 生きた事實……………一
- 二 吾が子の爲め……………九
- 三 地獄と極樂……………三二
- 四 疼痛と煩惱……………四〇
- 五 母堂の宗教的感化……………五〇
- 六 主と親……………六二
- 七 不斷の擁護……………七二
- 八 一念の妙趣……………八二

九 悲觀か樂觀か……………九〇

十 死の感想……………九四

十一 友情と追福……………九五

十二 攝取不捨……………一〇七

十三 禱り得ぬ心……………一一三

十四 獲信の記……………一二三

十五 法悦……………一三二

十六 傳道の感……………一四四

十七 現在に入用……………一四七

十八 歳末の記……………一五〇

十九 未見の友……………一五七

附録

目次

二十 佛陀より預る身體……………一六九

廿一 美しい臨終……………一七三

廿二 母を憶ふ(上)……………一八二

廿三 母を憶ふ(下)……………一九四

廿四 親の恩(上)……………二〇六

廿五 親の恩(下)……………二一七

一 信仰の妙趣……………(前田慧登)……………一

二 善巧攝化……………(近角常親)……………一三

三 病牀の記を読む……………(上杉文秀)… 四
 四 福間久米吉氏……………(多田 鼎)… 五
 五 獲信の餘瀝……………(泉 道雄)… 八
 六 葬儀の模範……………(警世新報)… 一〇

實験の信仰

菅 瀬 芳 英 述

一 生きた事實

宗教は、切實な内心の要求であつて、生きた問題であるから理論や空想に耽つてゐる間は、到底その堂奥に入ることには出来ない。然し徹底した人生觀に觸れ、活社會の上に立つて、凡ての問題を眞面目に考へ、寸時も自己の立脚地を空虛にせなかつ



たならば、最後に精神生活の新人となることが出来やうと思ふ故に倫理道德の觀念が強く、日々の行爲が空虚でない、意義ある生活を續けて向上の一路を辿る人があつたら、其人は精神生活の第一歩を踏んだ人といふことが出来やう。今此に紹介しやうとする、神戸の人福間久米吉氏は實に其人である。

氏は活社會の園内を馳奔して、波瀾多き奮闘的生活を續けられた人である。その性質が剛毅不屈で、妄りに所信を曲げず、自己の意志はごごく、迄も押し通して、或る目的に突進するには全く他を顧みなかつたから、商業界の一部の非難は、常に氏の身邊を離れなかつた。然し身は商業界の狂瀾怒濤の間にあり乍ら、心は一瞬時も兩親を離れることが出来ず、父母に孝養を

竭すは人生に於ての第一義の務めであると信じ、生涯を通じて其道を怠らずに身に行ふてゐられたのである。實に氏に取つては孝道が人生唯一の生命であり、又力であつたのである。故に氏の傳を讀み、或は氏の友人又は知人から氏の平素の行爲を聽けば、氏が孝養父母を以て人生の最高理想とし、其道の爲に如何に努力せられたかを知ることが出来る。依て吾等が、商業界の舞臺に上つて氏が身を以て示した活動と、生涯の努力を一貫した孝道の至誠と、最後に佛陀無蓋の大悲に抱擁せられて、彌陀の淨刹に向つた満足とで遂成せられた、氏が五十年の歴史の頁を繙けば、其中から限り無い教へを得ることが出来る。

氏は明治三十九年の十月に瘡の大難病に犯されて、其治療の

爲めに四十年一月に根岸養生院に入院して、二月九日に第一回の大手術を受けてから、前後數十回の小手術の外、全身麻醉四五時間を要する大切開を八回も受けられたのである。いま月日の順に之を列記しやう。

- 發病……………明治三十九年十月
- 第一回手術……………明治四十年 二月九日
- 第二回手術……………明治四十年 四月十日
- 第三回手術……………明治四十年 六月二日
- 第四回手術……………明治四十年 七月廿四日
- 第五回手術……………明治四十年 八月廿二日
- 第六回手術……………明治四十年 十月十二日

第七回手術……………明治四十年十一月廿七日

第八回手術……………明治四十一年一月二十日

終焉……………明治四十一年三月十七日

斯様に數度の切開の爲め、右頬部は遂に全面切り除かれて、右耳右眼は全くその用をなさないといふ有様であつた。食物の如きも僅かに管で咽喉の中に注ぎ込んでゐるといふ状態であるから、病人の苦痛煩悶は勿論のこと、一家の人々の悲痛は實に言語に絶した。處が氏は此の難病が縁となつて、佛陀の救濟の事實を體現することが出来て、今まで最高理想としてゐた孝養父母の路から更に一轉して、本願一實の大道に乗托せらるゝやうになつたのである。

丁度今から八年前、福岡久米吉氏が吾が同和學園を訪はれて令息甲松君の世話を依頼せられたことがある。當時甲松君は法科大學に通學の身であつた。こんな事情から予は家庭の人々と縁を結ぶことゝなつたのである。

四十年の二月に久米吉氏が病氣の爲に入院せられたと聞いたので、取り敢はず予は根岸の寓居に馳せて、病床の氏を見舞つて三十分程筆談したが、その時氏は『自分は平素可なりに衛生に注意してゐるのに今斯かる難治の病に苦しむは何故だらう。又佛教では宿世の業といふことを言ふさうだが、一體どんな譯のものか。又佛様とはどんなものか。死後はどうなるものであるか』と種々質問せられたので、予はその際たゞ一應の話をし

てお暇乞をした。その時氏は、爾後時々宗教上の談が聞きたいから御苦勞を願ふといはれたので、其後大抵一週に一度或は數度氏の病床に就て法話をし、かうして一年有餘繼續した。之が縁となりて、氏は終に信仰の門に入つて、如來大悲の御恵みに浴せらるゝやうになつたのである。

然し氏のやうな、物質的黃金萬能主義の現代的商人が、如何に病魔の爲とはいへ、開法の縁によるとはいへ、容易に精神的新人の生活に入ることを得たといふのには、此に大なる根蒂がある。それは家庭の宗教である。抑も氏は、篤實な眞宗信者の母と、眞摯な敬神家の父との間に掬育せられたけれども、夙に商業界に身を投じた爲に、黄金の光に眩惑せられて、宗教の靈

光を仰ぐ暇は無かつた、否、自分は無宗教であるといふことさへ考へなかつたのである。然し名も無い草木の種子でさへ、それが真に蒔かれてあつたなら、春の陽氣に芽ぐまぬ理はない。氏が母の宗教的感化は遂に徒然でなかつた。氏が人生上の實際問題に行き當つて、死の事實を切に感得せらるゝと同時に、潜在してゐた母の宗教的信念が、緩ろに顯在の状態に移つて、氏の心に痛切な罪惡觀を刻んで、遂に氏をして宗教の眞意義を味はしむることが出来たのである。

二 吾子の爲め

世の中に愛情も多々あるが、嚴父がその子に對する愛情に越ゐるものはあるまい。世の中に權威といふ言葉は多いが、然し嬰兒が慈母に對する權威程大なるものはあるまい。實に親子の關係は絶對であつて、理論を以て彼此言ふことは出来ない。親としては如何なる場合でも子を忘れる事は出来ない。特に異常な事に逢着した時には、其眞情が切々として人に迫るものがある。福間久米吉氏が病中執筆された、自傳『吾子の爲めに』の如きは、その最も著しい例證である。

たゞ自傳を讀め。堪へ難い疼痛と戦つて筆を執つてゐる慈愛

なる父を想起せずとも、文々皆涙であり、句々皆血である一篇の『吾子の爲めに』に泣かざるを得ないであらう。

吾子の爲めに

吾輩は安政五年五月、廣島の一隅に誕生し、本年取つて五十歳なり。其間如何に渡世の方路を經過せしかを叙綴して吾輩の傳史となさん。吾輩はもと姉妹ありしも皆夭折し、所謂一粒種の男にして、慈親の愛撫は普通親子の比に非ざりき。従つて吾輩の之を感受したることも一般以上にして、此觀念は終始一貫したり。然し不幸にして、幼より身體虛弱にして、拔世の偉業を遂成せんとするの壯志なく、否、其勇を抱く能

はざりしを以て、唯單に慈親の安心し得る慰藉を供して、孝の一念を貫徹せん事のみを吾輩終世の願望と爲したりき。されば此の孝養の一事こそ、吾輩が地上唯一の企業と目的にして、手段の劣、方法の拙は選ぶ所に非ざりき。蓋しこれ貧家の兒たりし吾輩にとりて事情止むを得ざるに出でたりし也。吾輩が六七歳の頃と覺ゆ。母が適々背部に癰を患ひ給ひしことありき。初の程は、母は之を包みて明し給はざりしが、何時よりか吾輩之を耳にせしより、其悲痛例ふるに物なく、幼な心に、今にも世を去り給ふかの如く感じ、哀泣母の身邊を離れざること數日數夜に亘り、傍人の之を止むるを聴かざることありき。此れ元より凡庸の事なりと雖も、幼時より如何

に親思ひの念深かりしかを證する例となすに足らん。此幼な心は長するに従ひて愈々深くなり、瞬時も吾輩の心意と離れず、極力之を完成するに旃めたり。今に至つて其當時を追想すれば、我乍らその堅志に驚かざるを得ざるなり。明治十二年迄は廣島の郷校に學び、其間英語の修養を爲したりしが、之れ他日素志の幾部を成就するに多大の便益となりたりき、同年、郷友數名と共に東京に上り、開成學校に入門せしも、留ること少時なりき。蓋し吾輩の病身にして勉學を許さざりしも其一因なりしが、孝養の資を得るに急にして、悠然、一般の子弟と歩調を共にし、他日の大成を期するが如き身に非ざりしこと實に其當時の主因なりし也。退學校神戸に往き、

留ること數年なりき。其初め同地に至るや、直に米國人某氏に投じ、通譯人となりて月々四五十圓の收入を得、一家を仕繕ひ之を慈親に供し、始めて宿志の一部を貫徹したり。此時年既に十有九なりき。而して右の如き位置に永く満足すべきに非りしより、同米國人を説き、その推薦によつて三菱會社に入るこゝなれり。則ち同氏は岩崎彌太郎翁に吾輩を紹介せんとして、態々東京まで同伴し呉れたりき。今に於て之を思へば、外國人にして内地人を内地人に保證推薦せることは誠に稀有なることといふべし。吾輩に盡し呉れたる同氏の好意は、トーマス、ウヲルスの名と共に終世忘れ得ざるなり。三菱會社に止ること三箇年、この間の生活は、吾輩をして多

少處世の難を嘗味せしめたり。これ吾輩が故らに同社に入ることを所望せし故に、前に外人に受けしよりも僅かの給料にて最下級の手代たるに甘んぜざるべからざりしによるなり。其頃政府の者にして三菱の専横に嫌厭たらざるものあり。之を力征せんとして、共同運輸會社の名の下に、一の汽船會社を創設したり。吾輩は遂に三菱を脱して、川崎正藏氏の紹介を以て同社に入り、時の社長たりし伊藤雋吉氏の下にありて専ら外人に關する事務に鞅掌したり。然るに當時世間の耳目は、總て獨逸に傾注せられ、彼も獨逸、此も獨逸と、所謂獨逸を模するには日も維れ足らざる有様にして、政府外交の方針の如きも全く獨逸の願示に依るものゝ如かりし也。吾輩も

此に見る所あり。則ち同會社を辭して、其當時、獨商中第一位と評稱せられたる某商會に入り、之に説きて遂に東京に支店を特設せしめ、吾輩之が店長となれり。而して吾輩は、一面同商會をして、獨逸當時の首相たるビスマルク公より、時の外相たりし井上馨伯に宛てたる推舉狀を得せしめ、一面獨逸公使の應援を依頼せしめて、専ら日本政府に取入るやう、可及的全力を拂はしめたり。此結果、右公使の推薦によつて吾輩は井上伯に面會するに至れり。實に廣島人たる一青年が此の如きを得たるは、當時に在つては異數のことなりし也。并は他ならず。當時政府の顯要は、總て薩長人の占領する所となり、兩藩人ならでは何事も容易に成功の途なく、特に政

府に關聯する事業の如き、悉く兩藩人に於てのみ掌握せられ他藩出身の者は到底干與する餘地無かりし時勢にてありたれば也。廣島人たる吾輩は顯門に縁邊なく、四圍皆吾輩を知る者無かりしより、已むなく外國人を使操して登龍の門を開くべく奇策を弄したる次第也。而して、吾輩が井上外相に面會したるも、薩長人士中、語るに足るべき人物の仲介を依頼せんが爲にして、其結果伊集院兼常君を得たり。依て吾輩の位置を同氏に譲りて東京店長たらしめたりき。而も吾輩は同氏の背後に立ちて大に得る所ありしを以ても、世の未だ幼稚なりしを想見するに足らん。時に年漸く二十七なりき。斯かる間も、青春の霸氣鬱勃として押ふべからず。遂に伊集院氏と

合はず、年餘に垂んとして右商會を辭引せり。但し三菱を去りしより此時迄は、所謂吾輩の天一坊を實演したる時代也。同商會を去りて漁食の道に離れし吾輩は、餘財ある身に非ざれば、随分窮苦に陥り、糶賣屋の主人とまで零落したる事ありて、青春時代の良訓を嘗めたること屢なりき。忘れ難きは此時なり。或朝の如きは既に其日の米鹽にも事缺きたる有様なりしが、吾輩には糟糠堅忍の良妻あり。吾輩を慰安し。他日の大成を期し、泰然兩親に奉侍して、曾て些も窮苦を慈親に知感せしめたる事なく、吾輩をして瞬時も後顧の不安なく勇邁壯舉を企圖せしめたり。此の如き良妻キヨの賜は、吾輩一日も忘れたる事なし。之より聊か吾妻に就ての叙述を試む

べし。唯憾むらくは吾輩に詞文の才無く、同女に就て十分なる叙述を盡し得ざること、これ多大の恨事なり。同女は長崎の人松田藤吉氏の家妹にして、同家の姻戚にして吾輩の長友なる、故白木久風君の媒介により、慈親の承諾を経て、明治十六年結婚の儀式を挙げ、爾來居を東京にトし兩親を神戸より奉迎して、京橋區丸屋町に一家を構へたり。斯くて團樂せる家庭の常態は、歡笑屢々屋外に溢るゝ有様にして、特にキヨ女が内助の婦道を全くして兩親の満足を贏ち得たるは非常の幸福にして、吾輩の最も喜ぶ所なり。父母が同女に對する垂愛の情、吾輩に對するよりも深かりしを見ても、同女の天性至孝なりしを證するに足らんか。吾輩は其當時素より貯蓄

の餘力あるに非ざれども、兩親の健全なると共に三人の男兒ありて、一を甲松二を達吉三を正吉といひ、家庭の嚴肅且つ圓滿なる、何人も吾輩の幸福を羨望せざるものあらざりき。明治二十年、一外人の紹介に依りて、某英商會に入り東京店の支配を囑託せられたり。而して東京に於ける凡百の事業は吾輩の多く感心せざる所にして、國家の爲め同商會の財力を活用して、大に輸出業を企圖せんと之に全力を傾注し、原亮三郎、小野金六の兩翁を説て、夫々石炭輸出に力を借されんことを以てしたり。幸に二翁の助力により、九州に於ける最多量の輸出を實現したるは、吾が組合を措いて他に之なく、特に唐津港に外國船を廻航して輸出を創計したるは、吾輩を

以て嚆矢とする也。而して一面神戸に於ける米穀輸出は、従前時の政府を代表しワットソント商會に於て主として取扱ひ來りしが、適々政府が意向を更改し、各商自由の貿易に放任せしを以て、斯の商も亦吾輩をして之に従事するの好機を與へたりき。明治二十五年十一月十二日は吾輩が地上生息中の最大の悲哀に逢着したる厄日なり。則ち吾輩の父君が此世に告別昇天し給ひし日にして、其御肉體に對しては、最早慰安を捧ぐるに能はざるに至りぬ。于時御年七十有五。唯だこの上は世上吾輩の名を正しくし、以て無形の孝道の一端を致すより外途無きに至れり。而して其葬儀を營むに當りては、吾輩の有せる財力は、殆んど擧げて之に傾け盡したりき。是れ

他無し。吾輩の命脈は兩親あつて存すといふ、吾輩の主義に出でたるものにして、資財そのものは吾輩の眼中に重きをなさざりしによる也。而して此歳を以て、廣島にある宮田、深田の兩叔母に對し、月々衣食の料を供送する事となしたり。その翌二十六年居を神戸に移し、是より關西に於て専心外國貿易に従事することゝなれり。抑も父君を是平、母君を恒子と申上ぐ。今父君の性行の一端を掲ぐれば、寡言にして温厚、敬神の念篤く、人に接する誠實篤信、特に好んで陰徳を積み佛氏の所謂無我を實現したる人にておはしたりき。御在世中一人の難敵なかりしを見ても之を證するに足らん。是れ他なし父君の至誠常に人を貫くの高徳を有せられしが故にして、

郷黨皆父君を至誠なる君士人と稱譽したりき。而して母君の性格に至りては勇邁不撓の資に富み、眞宗の強信家にして、よく事物を悟了するの明ありし異常の偉婦人にておはしたり父君の良助として婦道を全くし給ひしと共に、吾輩の賢母として嚴正なる教育を施し給ひたりき。この兩慈親あり久米吉の今日あるを得たる蓋し偶然に非ざるべし。吾輩之を福間家中興の祖と追仰肅慕せざらんとするも能はざる也。吾輩關西に來りてよりは、タンク船にて石油の輸入を創始し、以て斯業の發展を現實にし、而して又、故阿部彦太郎並に藤本清兵衛兩氏等に謀り、時の政府に代りて外國米の輸入を企行し、以て當年の瘠收に補すること多大なりき。其他、兩宮敬次郎

小野金六、成川尙義の諸氏と計り、外國市場に國債を販出し、以て外貨移入を計策し、遂に之を成立せしめて開國以來初めて參千五百萬圓の巨資を輸入せしめたり。其他何、其他何業と、吾輩相應の事業をも整成したらんが、夫等を併叙して得々たる吾輩に非ず。但し前條、一二遂成したる事業を掲げたるは、事の順次を述ぶるに當り叙説するの止む無きに出でたるまでにして。吾輩がこの傳史を書く本來の目的に非ず。特に吾輩が成したりといふ事業の如きは、所謂兒戲に等しき眞似事にして、人間業、否、一箇の男子として成したる業として數ふるに足るものに非ず。記せよ我が裔。この傳史を遺せる足下等の祖たる吾輩は、假令皮相上、足下等の標元に價す

べき偉業なしと雖も、人類と生れて負へる大義務の一なる孝の一事に至つては、之が一端を完成し以て足下等が追敬を受くるに躊躇せざるべき事を。此れ此史を遺せし本旨なれば、二二事業の成功は、吾輩に於て敢て誇示する所に非すと知るべし。時は明治三十年一月十八日、又第二の悲哀は來れり。母君今や又世を終へ給ふの不幸は來りぬ。筆を採るさへ涙の種、泣て／＼泣き渴らすも、其の御靈は反し奉るに由もなし御年七十有三、遠く地上を離れ給ひては、幽明境を異にし、再び聲咳に接し能はざるは誠に人生無上の恨事たり、吾輩はその前日東京に在りしが、急電の招く所となり倉皇神戸に歸りて母君の床側に侍しぬ。病母は吾が顔を視、聲を聴くこと

數次にして、遂に莞爾として敢へなく浄土に逝き給へり。而して其葬儀は嚴肅盛大に之を營み、以て吾輩が慈母の肉體に對する最終の孝禮を完ふしたりき。星移り物換り、母君の五年の追祭を營むに當り、東京に葬り申せし父君の遺體と、神戸に埋葬致せし母君の遺骸とを、廣島比治山の靈域に移葬したり。是れ慈親の世に在はせし時、郷關廣島へ歸り見たしと宣ひし其言葉を追想し、せめて遺し給ひし御體なりとも御供申し度しと、此の如く其靈棺を御移し申せし次第也。明治三十七年日露開戦の當時、十數年間吾輩の一身を捧げ、以て渡世を共にせし英商某會社と意志の一致を缺ぎしを以て、遂に之と連鎖を截ち、閑日月を得たりしが故に、其翌年末より三

十九年の晩秋まで、滿洲の地を跋渉して、視ること殆んど一歳に及びしも、吾輩の見地より論斷を下せば、老清國にして利權回收等の迷夢より覺醒せざる限りは、我が祖借したる大連より進入し、若しくば世の所謂我が勢力範圍てふグロドコロソングを利用して北奥へ猛進するとも、滿洲の開展は得て望むべからずと吾輩は斷念し、依て滿洲を辭して歸途に就きしは實に三十九年十月なりき。この月適々小豆大の腫物、喉頭附近下顎右側に發生し、之を東京なる専門家菊池循一氏に診察せしめしに、性質不良油斷大敵なるべしといへり。依て更に岡田和一郎、佐藤三吉の二大家を敲きしに、孰れも同案なりしを以て、遂に四十年二月初九、岡田氏執刀の下に大手術

を實行し、惡腫の病根を切開したり。聞く、この手術は四時間に亘りたる難療治なりしと。従つて其癒合も易々たらず。約百五十餘日を経過したる今日に至りても未だ平癒に至らず是より猶ほ幾回の手術を要するやも測知し難し。以て如何に重患なるかを想察し得べし。夫は兎も角。今回病床に臥して以來精神上の慰安を得たることは一再にして止らず。勿論、この長日月、稀有の病苦に呻吟し、其苦難煩悶は傍人の知想し及ばざる所なりと雖も、上述の慰安、即ち人世缺くべからざる偉大なる光明を仰ぎ得たるに比すれば、病患の苦痛何かあらん。特に吾輩は時々左の如き考へを以て病中の心を慰藉し得たる事ありき。亦滑稽に非ずや。病魔と醫術と其の勝敗

を決すべく、其舞臺に供せられたるは、地上の殘屑たるこの老軀にとりて何の光榮か之に過ぎん。其結果の如何が適々以て醫界に資するの一助とならば、老後の思ひ出之に過ぐるものあらず。唯だ望むらくは、醫術をして日軍に病魔をして露軍に喩へしめよ。而して吾輩の老軀をして彼の滿洲に比せしむべきかと。斯の如き次第なるを以て、他人の如く煩神憂慮なし。特に長子甲松は至誠至孝以て吾輩を遇し、他の二子達吉正吉亦然く、其間孝養の道に於て些の厚薄なき、是又除憂却煩の一因たるべし。而して常に言へるあり。吾輩に拂ふ彼等の孝情の至深至厚なる、反て我身の足らざるを恥ぢしむる程なりと。以て吾輩の多幸を誇るに不足せず。吾輩は一視同

愛の宿論を有するが故に、吾輩の三子に對する愛情更に偏重無し。此の主義よりして吾が財は之を三分すべし。但し吾輩の老骸に對する彼等の義務も均等にして輕重なしと雖も、主權は當然年長者に在つて存す。無言啞舌百有餘日。其間吾妻ギヨの我が病軀を看る懇篤誠貞、又三子の之を護する至孝至順なる、吾輩窃かに合掌して其温情を欣謝する事常なりき。一は吾輩の病苦を慰せんが爲、一は悟道の光明を知らせしめんが爲に、眞宗の高僧を聘して其法話を聽聞せしめし事數次漸く迷境を脱して如來の大悲に歸命し、安泰なる大道を悟らせしめたるが如きは人間の至幸にして、是全く甲松至孝の賜に外ならざるべし。御兩親を安泰に天上に御送り申せしを以

て義務の大半を終了したるものと思惟せる吾輩が、知らず識らず五十年の知命に達したるは誠に奇といふべし。此の五十年の曉に於て此の大患に罹る。此の大患に罹りたればこそ、煩惱の俗業を洗擲し以て悟道の大安を得たるを思へば、佛神の微妙真に驚く可し。是より以後吾輩の半生に於て企圖する事は、皆天真爛漫、以て人生の眞價を表現する外ならざるべし。

此傳史は病苦の小康を得たる毎に採筆したるものにして、大患の餘恵に出でたるものなれば、全般を通觀せば病筆弱墨の謗は免れざるべしと雖も、是れ人世の通規にして、吾輩は敢て裝勇擬壯の痴は演せざるべし。吾が裔夫れ之を諒せよ。以

上の外言ふ可き事も無く、又言ふの要無しと信じ、此に謹んで之を清書する也。

三 地獄と極樂

たゞ一つの小路にすべての希望を繫いで、ひたすらに急いでゐた路は窮つて、そゞり立つ絶壁の上に出だした時、果敢ない旅人の心はどうであらう。自失するばかりの絶望も、懸ては込みあぐる悲哀に打ち消さるゝであらう。

氏が三十九年の十一月に、醫師の診察を受けて、不治の大難症であると知られた時は實に斯うであつた。氏は回春の期も無い病んだ身體に、希望の光もない漆黒の悲哀を抱いて、正しく地獄に墮ちたと思はれたのである。氏は病床日記を『地獄日誌』と名けて、左の序文を添へられた。

明治三十九年十一月といへば、僅か三箇月前にして、喉頭に武大の魔物顯れ、疼むが如く痛まざるが如く、別段念頭にも懸けざりしが、年の十二月菊池先生の高診を受けしに、先生診察の後稍や眉を顰め何等か先生の一考を要するものゝ如かりしかば、變狂なる久米吉は此瞬間に於て、普通一般の病症に非ざるを推察しぬ。是れ今回は神佛の法律に違背したる刑罰を現在に受けざるべからざる端緒なるかと思はれたり。越えて四十年の二月九日午後正三時には、生き乍ら閻魔の廳に引き出され、赤鬼青鬼列席の上いよゝゝ顯外しの極刑に處せられたり。爾來等活地獄の中に日々呻吟して、刑期の滿つるを待つのみ。噫、高醫先生、予が病苦の情況を憐察あれ。

明治四十年二月十三日 根岸養生院にて久米吉誌
冷やかな手術臺上に在つて、切開を受けられた氏の感想が、
右のやうな痛ましい文字で顯れるのは無理からぬことである。
又氏は是まで諸種の事業の爲に東奔西走して席の暖るに暇の
無い人であつたから、病魔が事業そのものを氏の手から奪ひ去
るさへ、氏には堪へ難い苦痛であるのに、剩へ氏を沈黙の牢獄
に監禁したのである。悶々の極斯んな事を書いて示されたこと
があつた。

終日、語らず笑はず、恰もだまり地獄に座するが如く、誠に
徒然の極に御座候。

溺るゝ者は藁片わらすべでもつかむといふ。自己を信ずることが不可

能となれば他に向つて何物をか信頼しやうとする。氏が一度岡
田博士の手術を受けてから、氏を信ずる事が頗る厚くなり、爲
に病苦に伴ふ不安の念も消滅し去つたので、心機一轉、地獄日
誌を『極樂日誌』と改題さるゝことゝなつた。その改題の辭と
して次のやうな記述がしてある。

人間の淺薄なる知識は、能く深遠なる天の大法を窺ふ事を得
ず、不知不識神佛の法律に違背して、久米吉は壯嚴侵すべか
らざる、神聖なる天の大法の命ずる所の極刑に處せられ、悲
慘無窮の苦境に陥りたり。時々刻々病患其威を横暴にし、疼
痛は益々其度を増し、不快不安は日夜間斷無く所謂地獄の責
苦を受くるが如し。當時の心中如何なりしぞ。如此くして底

止する所無からんか、餘命を稟受する事長きを得ざるべし。而も其艱其慘極に達して、人生の事此に其の終を結ぶべし。是れ實に久米吉が病苦によつて得たる感想なり。然るに幸なる哉此に岡田といふ一個の人間に邂逅し。其仁慈其辣腕天意に反し神已上の仕事を司るに信頼し、從容自若靜かに謹んで其手術を受けたる次第也。手術後覺醒の時商弟田邊なる者の語る所に依れば、予の動作沈靜にして行術の便尠からざりきと。是れ他なし。予は既に期する所あり。岡田先生を信頼して自ら泰山の安きに在ることを確め得たればなり。於茲乎知る。手術後予が病床日記を誌すに方り。地獄日誌と題したるの誤りなりし事を。即ち前途の光明希望を與へられたる岡田

先生の鴻恩に對し、題名を極樂日誌と更改す。

明治四十年二月十七日 於根岸養生院久米吉誌

此の二つの序文は、遺憾なく氏が第一回手術前後の感想をいひ顯してゐる。實に躬自らその實際に臨んだ者で無くては、到底斯様に人を魅する一種の力ある文字を見ることは出来ない。懸崖の上に疲れ果てた身を横へて、迫り來る間に纔かに息づく旅人が、間近い丘に灯火の瞬くを見出した時には、そこに限り無い希望と信頼とが潮のやうに満ちて來るであらう。絶望の淵に沈み果てた氏も、岡田博士を信頼されてからは、前途に閃く一道の光明を仰いで、一身の安危はすべて是人に托するといふ心懸けになられたのである。げに信ずるは力である。

我が信する人に全托して、精神を安んじ動作を沈靜にするといふことは、殆んど眞宗安心の第一歩迄進んだものと見られるのである。氏が後に不變不動の信仰を見出されたのも、その萌芽は既に此時に萌されてゐたのである。

前に『地獄』といひ『極樂』といはれたのも、單に意味の強い字を假つて自己の現在の情緒を顯された迄のことであつて、唯だ信賴すべき人を見出してすべてを打ち任せ、やがては來るべき全癒の樂境に向ふ日暮しを、『極樂』といはれたのである。實義に達して使はれた名目では無い。然るに不思議にも後には十方法界の中に唯だたよるべき佛陀を見出して、十方の衆生を一子の如く憐念し給ふ大醫王に全托して、無明長夜の大難病の

日暮しを通して、やがては來るべき歡樂に微笑まれたのである。實に奇しきは如來の巧方便である。

四 疼痛と煩悶

設ひ、身は熱鐵の中に浸されても、心だに健かであつたなら
 大安慰の圍域に微笑むことが出来るであらう。設ひ、心は懊惱
 の雲に閉ざされても、身さへ健であつたら、歡樂の風で一時的
 霽れを見ることが出来やう。身は堪へ難い疼痛に包まれ、心は
 忍び難い煩悶に圍まれて、而もその苦痛煩悶が刻々に増して行
 く氏は、實に身の置き處も心の遣り場も無かつた。氏は時々身
 心の激痛を書いて訴へられたのである。

○ 自ら病苦に悩み、無爲にして日を消す。徒らに家族の心を痛

ましむるのみにして、些も世を益する事なし。不治の病床に
 生を希ふの意義、抑も那邊に在りや。天、希くば吾れに死を
 賜へ。

○ 連日連夜の激痛に、耐忍の勇氣沒消せんとし、天に向つて我
 れに死を賜へと、狂氣的に精神を失せんとせり。御憐情を垂
 れ給へ。

○ 益々病狀は募るのみなり。余が病は、毎時切開後に至つて愈
 々重し。然るに何人が言ひしぞ、病重るに非ずして神經の作
 用なりと。是れが抑も、總ての不平の大因なり。之を言ひ換

ゆれば、余が言を信用せざるに基したるには非ざるか。切開後四五日にして第二の小切開を受くるを見ても、余の言の不實ならざりしを證するに足らずや。今日迄は、二十日後ならでは切開の手術を受けしこと無し。而も一つ所ではなし。萬事足下等の自由に委すべし。余は不幸なり。余は罪人なり。

○
今曉來、舌根の右側附近より、時々電光發射するが如き疼痛を起し、其の時々右側の耳元に響くが如き感覺は、贅肉除却前と同様の疼痛なり。其不快甚し。今回の手術後二日間は、快方に向ひたりと思惟せしが、今日の病狀は、亦もや手術前の状態となれり

○
昨今の疼痛が、顎骨切斷の局處より發生するものとせば、余は亦た何をか言はん、余の感ずる所によれば、切斷したる顎骨の兩端を結接したる鐵板の前部が頬肉と撃衝するによつて鋭き痛みを起すなり。頬肉の膨腫するを見ても知るべし。依て度々其の苦痛を訴へ、速に交替の方法を講せられんことを要求せしに、之を更改するは尙ほ早くして月餘を待つべしと此れ道理ある應答にして、此の期間に附近の筋肉の生育を要すれば也。然りと雖も生ける此身の苦痛は容易に堪へ得べきものに非ず。特に食事毎に疼痛を起し、今より月餘の長きを思へば心神慄然たり。當院高醫諸兄、余が爲に憐みを垂れ、

鐵板問題につき、最良の道を講せられんことを謹請す。

○
君等の論議は岡田崇拜的なり。同氏は四月十日以前に常に言へるあり。此疼痛は奥齒を除却せば全退すべしと、其の之を行ふや更に寸効なし。依て又曰く。是れ贅肉あればなり此肉を切開せば可なりと。而して去る八日之に加刀し切開したれども是亦奏効の影もなく相變らず病苦は持續せり。氏は予に對して又曰く、此れ贅肉の殘餘あればなりと。而も之に加刀して何等疼痛の減退するもの無し。余思ふに、先生は這般の行術に實験なきに非ざるか。四月十日、五月八日、五月十四日、此三度の言責を思ふに、更に何等の信據すべき無し。言

ふを休めよ。當年の久米吉は依然たり。

○
正吉が、藥局より持ち來る新藥に對しては、毎時嚙々として余に勸む。これ一方より言へば、この危時に對して無理からぬことながら、一面より之を言へば、此を持ち來る者の心中決して智の完全したるものとは言ひ難し。持ち來りし藥品中今日迄余を苦しめしもの數回あり。其苦みが輕かりしは倅なれども、若し其試験極烈にして命を絶つものありとせば、不安たとふるに物なし。又一面余の身體よりいへば不幸此上なし。何となれば、右の如き藥品を余の身體に向ひて。其藥効の如何を試みるといふに至つては、其危險筆にする能はず。

能く甲松と相談して持ち來れ。

○ 余は過てり。余は悔むたり。茲に今朝まで、足下等に余が與へし非言非行は、全く余が本心より出せしものに非ざりし事を悔ゆ。足下等に向ひこれを深く謝す。唯願くばこの病者たる余が言余が行、時にありては非理なることあらん時に或は足下等の意に反することあらんも、此を恕し、之を撫し、以て看護の愛を厚くせられんことを願ふ。

○ 病夫、病父の慘状を見る卿等の意中は、余思はざるに非ず。病苦のあまり、余が心にも無きことを卿等に聞かせ、卿等

の平心を破りし事少からざりしと思ふ。恕せよ。此れ病の致す所にして、余が本心は此を筆にするも涙の種なり。

○ 此の様に、病苦中の苦惱は實に堪へられなかつたのである。それで苦悶のあまり不平が起つた場合などには看護の人々の心配は一通りではなかつた。けれども不平や小言の起つた時など適々予が參つて宗教上の話をすれば、自然に身も穩かになられ心も靜になられるのであつた。然し如何に心を抑へ身を忍んでもそれは一時の治りであつて長くは續かない。病ひの苦痛は益々嵩み、暗から闇へ越くやうな心細い感じも起る。いよ／＼堪へ切れなくなつて苦痛の中に切開を受ける。手術を終へて、や

れ嬉しやと安心する其下から、しつこくも亦疼痛が起つて來るのである。かくて疼痛は一回又一回、手術を受くるに従つて益々其度を高むるばかりで、病人の失望落膽は何とも例へやうの無い程である。時としてはもう手術は受けまいといふ想ひも起るけれども、手術もせず其儘にして置けば、尙更苦痛が激しくなり病毒が他に蔓延する恐れがあるから。どうしても切開を受けねばならぬ。尙ほ手術を受けたら、今度こそ幾分の疼痛が除くであらうといふ一縷の望みを持つて、苦痛を忍び手術臺に上らるゝのである。然し何度魔酔から醒めても寸分の奏効もなく却て苦痛の度を増すのみであるから、悶々苦しみのあまり醫師に對して苦情の出たのも無理からぬ事である。「當年の久米吉

は依然たり』と絶叫せられた如きは、氏の卒直にして而も剛毅不屈の性格が躍如として顯れてゐるではないか。斯く縁に觸れ事に當つて瞑り悶々叫び苦しんで病苦を訴へ苦情を叫ぶるゝのであるが、其苦情不平の下から本心に立歸つては非を悔む非を謝せらるゝのである。

身に疼痛の潮がすさまじい勢で迫つて來る時には、怵々難い苦痛を訴へて看護の人を罵り、疼痛の波が平かになると自らを責め、かうして氏は晝日終夜、身心の苦惱に寸隙もなかつたのである。

五 母堂の宗教的感化

善にまれ惡にまれ、家庭にその強い人が一人あれば、全體にその感化は波及するものである、まして眞の信仰のある人がその中にあれば、その影響は陰となり陽となり、その力は決して消ゆるものではない。此度福間家の人達が互に手を携へて信仰の門に入り、大悲の慈光に哺まるゝ身となられたのも、その基となるものは、既に亡き老母の感化に外ならぬのである。

始め福間家から母堂の實家に縁談を申込まれた時に、母堂の實家では、自分の方は佛教信者であるから、神道である福間家よりの縁談を擇ばず、宗教の異つてゐるのは此上もない不幸で

あるといふ理由で一旦は断はられたさうであるが、母堂は、少し考へる事もあるからといふので遂に入嫁せられたのである、母堂は良人の敬神の念と少しも衝突せず、よく調和して内助の功を全ふじて家運の隆盛を圖られたが、併しどうかして家内の人々に佛縁を結ばせ度いといふ、燃ゆる思は消すことが出来ず神棚の後ろへ竊かに佛像を入れて朝夕禮拜せられたのであつた。久米吉氏は平素外出勝ちであつたから母堂の法話を聞かるとは殆んど無かつたのであるが、令室其他家族の人々は時々法義上の話も聞き、又母堂に勧められて時々寺院へも参られたのであつた。母堂が寺へ参詣の時は、いつも下男の米吉がお供をしてゐたが、母堂は此の米吉にも佛の御慈悲を躊躇せず頻た

れたのであつた。寺から歸りの途すがら米吉に對して、今日の御説教は如何様に聞いたかと尋ねられるが常であつた。求法の念の全く缺けた米吉は、本堂に落着けばすぐ居睡りを催すのが例であつたから、明瞭な答の出來よう筈がない、前後不揃な事を言ふては其の難問を遁れやうとあせつた。すると母堂は諄々とその不心得を論じて御慈悲の貴いことを述べられるのであつた。又家族の人も、『御寺へ參つて眠る位なら、寧ろ參らぬ方がよからう』と申された時に、母堂は毅然として、『いや、眠つて居ても、如來様のお慈悲は、毛穴の一々から這入つて下さるゝから參詣するがよい』と戒められた。此の様に信念の篤い人であつたから、其人格的の感化は、如何なる人をも悦伏せ

しめずにはおかれなかつた。

嘗て福間氏が、神戸でタンク船を以て石油の輸入を計畫された事があつた。その時神戸地方の漁業者の一部は、タンク船が魚類に少からぬ害毒を及ぼすであらうと非常に恐れて、再三之を中止して貰はうと盡力したが、思ふ通りにならぬのに激昂して十數人の者を氏の邸に差向けた。その際福間氏は不在であつたから母堂がその談判の衝に當られたのであつた。處がはやりきつた者共は、『おまへの様な女でこの大事件がわかるか。久米吉を出せ』と意氣まく、『久米吉は居ない』、『居ない筈はない。隠して居るのであらう』とたけつて中々承知せぬ。『さあ、今日久米吉が聞かなんたら刺殺すのだ』と白刃を閃かして

怒號する者もあれば、『今日此花で葬つてやるのだ』と携へて來た花を打振る者もあり、騒然として殺氣が漲つた。その時母堂は少しも騒がず、心靜かに彼等に言はれた。『あなた方はそれ程まで久米吉に遇ひたいなら、私が一つの策を教へませう。それは外でもない。先づ私を先きに殺しなさい。さうすれば久米吉は極々親思ひの子であるから、何處にゐても母が死んだと聞いたら直ぐ歸つて來るに相違ない。その上で久米吉をあなた方が存分になさつたらわけはないでせう』。流石亂暴な者達も至誠の籠つたこの言葉を聞いては、初の元氣もどこへやら、一人去り二人歸つて遂に氏は無事なるを得た、其後彼等の中にあつた二人の者は、痛く母堂の心に動かされたと思ひ、前非を

謝して福間家に入出入するやうになつたさうである。至誠以て人の肺腑を貫くとは實に母堂の如き人を言ふのであらう。之れは偏へに母堂の確固たる信仰の賜で、心不傾動の境に遊んで居る者は常人の模し難い所が多い。而してこの信念が不知不識一家の人々の胸奥に滲潤して居たことは争はれないことである。氏が明治二十五年に父を喪はれた時には、父は敬神家であつたから神道で葬儀を營み、同三十年に母を亡はれた時は、母は信佛家であつたから佛式で葬儀を營まれた。宅には一間の床に右に神殿を設け左に佛壇を安置して常に禮拜せられ、十二日の父の命日には父の嗜好の小豆飯を供へ、十八日の母の命日には母の嗜好の鮓を供へて、家庭全體の人と兩親のありし昔を物語

つて、思ひ出多きこの一日を過さるゝのを無上の樂みとせられた。而して自分の居間には兩親の影像を懸け、南船北馬常に兩親の寫眞を侍して居られた。神戸にあつては日々兩親の墓參を缺がされず、日夜不斷に兩親といふ觀念は少しも念頭を去らなかつたのである。

嘗て一人の壯士が、神戸の氏の宅に来て、激論の末氏を打殺すと言ふた。氏は恐れもせずなづかれて、『宜しい殺されやう。然し人を殺せば君も相當の刑に處せらるゝは必定だが、其邊の覺悟は充分して居るであらう。自分はもう兩親を送つて此世に於ける孝道の一分は竭したから、最早兩親に就いての懸念はないが、君には兩親があるか。若し兩親があれば、君が刑餘

の身となつたら兩親の悲みはどの様にあらう。兩親は誰をたよつて餘命をつなぐことが出来るか。君も人を殺すといふ様な大膽な決心をするのだから、兩親の將來の事も充分考へてゐるであらう。『どうだ』と尋ねられた。壯士は沈思する事暫しであったが、痛く氏の言に感激し深く氏に心服し、非を謝して還つた。其後氏の部下にあつて商業に従事するやうになつた同氏は、此度氏の病を聞いて、支那の山東省から馳せ還つて、篤く氏の病床を見舞つたといふことである。

氏はかくまで至孝の人であつたけれども、宗教的信念といふやうなものは微塵も無かつた。否孝道のみが氏に取つての唯一の目的であり信念であつたのである。然し氏が孝道の精神から

母堂と同じ信念に達する事が、母堂を満足せしめ、又自分も幸福であると感じてゐられたには相違なからうが、境遇に碍げられてそこまで進まねなかつたのであらう。

然るに入信の第一因縁は此に萌すことゝなつた。先年令息甲松君が第三高等學校を了へて帝國大學に入らるゝ事となつて上京せられ、予の同和學園を訪はれて甲松君を托せられた。其後神戸に歸つて令室に對しての話に、『甲松を善い所に托して來た。母上の信じて居られた真宗の話も聞かれ、佛様にも朝夕禮拜が出来るし、母上が御存命であれば、さぞ喜んで下さる事であらう』と談されたさうである。それで氏には宗教といふ様な思想は毛頭無かつたのであるけれども、母上を思はれる孝心か

ら、佛様とか信仰とかいふ觀念が、殊に温い感じを氏に與へたのであつた。之が後に氏をして病苦の中より佛恩を感謝せしむる難有い因縁となつたのである。

忠孝の、道より外に道はなし、佛の道もこれよりぞ入る。

と行誠上人が詠まれたやうに、孝道と佛道とは密接な聯鎖のあるものである。

そして茲にたゞ偶然であると言へばそれ迄であるが、母堂の命日である十八日といふ日には氏にとつて色々の事が湧いて來るのであつた。四十年の八月十八日には自ら死亡廣告を書かれて死後の事を遺言され十月十八日から極度の煩悶に墜られて遂

に『獲信の記』となつたのである。令室も、『久米吉や私共は商業や家事に心を奪はれて、佛様の事にはさ程重きを置かず、懈怠勝ちな横着な日暮しをして居ましたが、母が常に言ふて聽かせて下さつた如來の慈悲といふことが、此度事實となつて顯れ、母の思ひ通り、家庭全體の者が如來様のみ心を戴いて、其心持で看護する様になりました。私はどうしても母は死んでゐられるとは思はれませぬ』と談されてゐた。

氏が一度不治の難病に罹られてから、氏の一家は忽ち落莫たる秋風が荒んだのである。その秋風によつて一家に繁つてゐた世上快樂の葉は散つて、嚴肅なる求道の冬となつたのである。而して一家さんざめく法悦の春に開く爛漫たる信仰の花は、母

堂が長らく培ふてゐられた感化の養ひによるのである。

染香人のその身には

香氣あるがごとくなり。

これをすなはち名けてぞ、

香光莊嚴とまふすなる。

六 主と親

福間家に、米吉の名を以て二十有餘年も勤めて居る大村運吉と言ふ下男が居る。生れは主人と同じ廣島で、我意が強くて、人の言ふ事など聴かない性分であるけれども、主人思ひは至つて深い、此度も家族の人々と共に主人の看病に餘念ないが、その誠實な働き振りは實に感心に堪へないのである。米吉は病人の食物を擔當してゐるが、それがなか／＼一通りの面倒でない何しろ病症が咽喉部であるから、病人は食物を嚥下することが出来ない。それで之を液體にして管で飲送しなければならぬ而も營養が澤山あつて害にならないものを選ばなければならぬ

のであるから、その苦心と言つたら實に非常なものであつた。然し忠實と熱誠とを以て調理した米吉の食物は意外にも非常に成績が善かつた。主治醫の岡田博士でさへも、『治療の方の研究は今日迄餘程進歩して居るが、飲送する様な食物の研究はまだ幼稚である。然るにこの調理方は殆んど完全に近いから、いつか福間式の食物として醫界に發表したいものである』と感服して居られた程であつた。

この様に眞心をこめて主人の看護に心を砕いて全快を祈つて居たのに係らず、大難症であるから長くは持てまいといふ事を耳にした米吉は非常に落膽し、長い間主人から受けた恩は廣く且つ深いのに主人の命は短くて限りがある。到底永く仕へる事

は出来ない。どうしたならばこの鴻恩に報ゆる事が出来やうかと、日夜深く胸を痛めたのであつた。然し懊惱する彼は、来る日来る日の、出来る限りの看護を以て、せめての心遣りとしてゐたのであつた。

時も時、折も折、彼は國許から母親が大病であるといふ音信に接した。彼が爲めには二人とない生みの親、たとへ片時でも枕邊に侍して、襦袢の内から育てられた大恩を謝せねばならぬと言ふて、大恩を受けた瀕死の主を残すことが出来やうか。主も大事、親も大事、彼は親と主との去就に身を悶わて、身の二の無いのを憾み、身の存在を呪つた。底ひも知れぬ悲しみに沈んで將に狂せんとしたが、遂に道は開けなかつたのである。倫

理的の理想を誠實に實現しやうとして努力を續けても、此所まで來ると行き詰まつて仕舞ふのである。恩の輕重を論ずるのは第三者の仕事であつて、眞に報恩の念のある者には輕重の差を見分る事は出来ないのである。一飯の恩に一命を酬いた者さへあるといふ。されば、この大矛盾を如何に解決しやうかといふことは、過去多くの人によつて繰返されたる問題で、彼の重盛の如きは死を禱つたのであつた。然し重盛は死してその問題から免れても、與へられたる問題は依然として未解決のまゝ、今に残つて居るのである。然るに米吉は幸福であつた。嘗て福間氏の母堂の手によつて彼が胸奥の苗代に蒔かれた信仰の種子は、折々襖越しに聞くともなしに耳傾くる聞法の雨露に催うされて

芽ぐみ、大悲の慈光に照されて宿善の花を開き、悲歎煩悶の酷暑を経て、此に獲信の收穫を喜ぶ秋となつたのである。彼は靜かに思ふた。阿彌陀如來の御本願によつて、未來佛様にして頂いて、無量壽の悟を開いて死なゝい事になれば、幾久しく主人に仕へる事が出来るのである。今迄有限の相待善を以て努力して、どうかそれを實現したいと思つたのが間違であつた。無限絶待の境界に入れば、我れの働きも無限となり不死となつて、眞實の働をする事が出来る。又大悲の如來に全托した後の日々の仕事は佛恩報謝の大行ときくからは、主人に仕へる事が即ち佛様に仕へる事となり、主人の看護が直ちに母親の看病となるのであると、彼は頓に無蓋の大悲に想到したのであつ

た。それと共に込みあぐる歡喜に、今迄の苦悶も雲散霧消して何事も佛の爲さしめ給ふ所に従ふのであると、いそ／＼として病床に侍したのであつた。そして予に、従前の懈怠を懺悔し今の安住を喜悅し、悲喜の涙に咽ぶのであつた。

或時、米吉の仲間の者が米吉の念佛を唱ふるのを笑つて、『貴様なんぞが、念佛を唱へる柄か。それがほんとの鬼の念佛だ』と嘲弄した。所が米吉は怒るところか非道く喜んで、『そうだ、善く言つて呉れた。己れはおまへ等も知つてゐる通りの悪性者で、鬼のやうな者だから、み佛のお救ひに預る事が出来た鬼だからお念佛を稱へるやうになつた。ほんとに鬼の念佛だ。あゝ難有い事を言つて呉れた』と謝した。

彼が神戸に歸る時には、いつでも自分の妻に向つて、『なせ此様な難有い事がわからぬか。なせ佛様のこの大悲が信せられぬか』と、急に逼つて一時も早くお慈悲に氣づかしてやらうとあせるのであるから、妻は時々袖を絞ることがあつたといふことである。然し彼が妻を思ふ一心と、遣る瀬ない大悲のお導きとによつて求法の志が動いて、度々福間夫人のお供をして法筵に連るやうになつた。四十一年六月二十四日、福間氏の百ヶ日の法會に予は神戸にいつて法席で彼の妻の熱心な態度を見て、親しく不虛作の佛徳を讚嘆したが、宿縁の純熟したのか、お慈悲を感受して深く歡ぶやうになつたのである。

予は米吉夫婦の懇請によつて、二十六日の晩、彼等が宅の法

筵に臨んだのである。六字の尊號の懸けられた下には、黒すんだ箱が据わられ、其上には故主人の寫真と、一年前別れた老母の遺骨が安置せられ、一穗の燈火は幽かに搖いで、實に莊嚴な感に打たれた。予は今迄、きらびやかな聖龕の前に額いて、看經說法の筵を開いた事は度々であるけれども、此の如き信念から顯れた質素な嚴肅な法縁は初めてあつた。主人夫婦は何くれとなくもてなして心から喜び、隔て無い虚飾無い眞摯な睦びに法悦歡喜の温かさは室内に満ち充ちて、此の世の様とも思はれず、そゝろに鸞聖人の古へに思ひを通はすのであつた。

此法筵に列つて和顔愛語してゐた近隣の善男善女の五六人中に一人の老婆が居た。この老婆は福間家の借家に棲んで居る

者で、米吉夫婦とは犬猿も管ならぬ間柄であつた。それで従前は口論もし衝突もしたが、米吉が信仰に入つてからは、よく寺参りをして法義を慶ぶこの老婆とは非常に昵懇になつたのである。而して今夕も此老婆が第一の正客であるといふ事である。貪瞋の刃相觸れて、罪業の火花を散してゐた讐敵も、觸光柔輭の願益によつて、長い間の隔執もとけて、同一念佛の法筵で談笑するとは何といふ不思議なお力であらうか。

かうして米吉が入信の迹を辿つて見れば、主人に對する忠節の至誠から發足したのである。主は孝道から佛道に入り、僕は忠節から佛道に入つた。實に行誠上人の歌は我等を欺かないのである。

無碍光の利益より、	威徳廣大の信をわて、
かならず煩惱の水とけ、	すなはち菩提のみづとなる。
罪障功德の體となる、	こほりとみづのごとくにて、
氷おほきみづおほし、	さわりおほきに徳おほし。
名號不思議の海水は、	逆謗の屍骸もとゞまらず、
衆惡の萬川歸しぬれば、	功德のうしほに一味なり。
盡十方無碍光の、	大悲大願の海水に、
煩惱の衆流歸しぬれば、	智慧のうしほに一味なり。

七 不斷の擁護

福間氏の令室は、入嫁せられてから、篤信家である老母の感化を受けられて、多少佛縁のあつた方である。福間氏が不治の病に罹られてからは、み佛の導きによつて、温情を盡して看護して居られたのであつた。

けれども、長い間の病人の看護と云ひ、一家の將來に對する不安といひ、いろ／＼な苦勞や心配が重なつて來れば、遂に愚痴に歸られざるを得なかつた。主人の友人やその他の人が、健かで活動して居られる有様を見ては、羨ましくもなり嫉ましくもなり、なせ主人は病氣にかゝられたであらう、なせ私はこん

な不仕合せな者であらうかと、夫れからそれへと止め度もなく思ひ煩らはれたのである。いや／＼こんな事を考へてはならぬどうかして諦めやうと、幾度思ひ直されても、心の苦しみは嵩まるばかりで、竊かに聲を吞んで泣かれた事も幾度あつたか知れない。それが爲に遂に神經衰弱症に陥られたのであつた。悪い時には悪い事が重なるもので、四十年の八月頃であつた二十餘年間秘してあつた、主人の妾の事が令室の耳に入つた。それでないさへ神經を痛められて居る令室であるから、非常に悲しまれて、和氣霽々たる一家は頓に荒涼慘憺たる曠野のやうになつて仕舞つた。

予は時々訪問しては佛陀の大悲を話して慰めて居たので、令

室も氣を取り直して、も少し心も廣く持つて、何事も因縁であるから、大切に看護せねばならぬ、諦らめねばならぬと思ひ直さるゝこともあつたが、信仰に入られぬ前の事であるから、その心も水に描いた畫のやうにすぐ消え失せては、また悶々悲まるゝのであつた。かうして來る日來る日を泣いて暮された令室は、神經衰弱は愈々昂まつて、それに脚氣病まで併發して、箱根へ轉地療養せらるゝの止む無きに至られた。その後子が福間氏の病床を訪ふた時に、氏は、

昨今、家内脚氣病の爲め、五日前より、甲松同伴箱根へ出養生に參り候。家内も諸種の事を心配して心を痛め居り候へば萬事放棄して療養せよと申しつかはし候。

と語られた。令室が箱根から歸られた時に、お供をしてゐた侍女は、『奥様は、箱根御逗留の間は、毎日宿にばかり籠られて朝も夕も泣いてばかり居られましたから、散歩などおすゝめ申しても、おすゝみならないし、どうしてお慰め申してよいやらほんとに當惑いたしました』と申してゐた。これでも令室がどのくらゐ悲痛に沈んで居られたか、わかるのである。

處が、どうかして令室の煩悶を慰めやうと、千々に心を碎いてゐた、彼の忠僕の米吉は、一日更まつて令室を諭して、『あなたは自分の事には氣がつかずに、人のことばかり氣をつけて人が悪いと常に人を責めては自分から苦勞を招いて居られるから、心の休まる時はありません。よく考へて御覽なさい。私共

のやうな大罪人はありますまい。あなたもその一人でありませう。そのあなたが人を責むる資格がありますか。かく申す私も御承知の通り、悪性者の我儘者でありましたが、一度び佛様の御導きによつて自己の罪惡に氣附かして頂いてからは、今迄とは心が變つて、かぎりない樂しみの日暮しをさせて頂くやうになりました。そして今迄なした事思ふた事言ふた事は皆偽りであつて眞實でなかつた事を悟らして貰ひました。懺悔させて頂きました。あなたも少しは佛恩に氣づかして貰ひ、御自分を反省なされ、懺悔なさつては如何でありますか。令室は非常に立腹せられた。自分の此の境遇に少しも同情せぬばかりか、主人に向つて説諭がましい事をいふ。そんな事をいふ身分ではあ

るまいとたしなめられた。米吉は常に無い眞摯な態度となつていろ／＼令室と論諍して、偕て言葉を改めて、『あなたが、近頃特に氣をいろ／＼させてお苦しみなさつて居るのは、あのお妾のことでありませう。その事をお考へになれば、お口惜しうもありませんし、お腹立ちでもありませんし、私も御同情に堪へませぬ。然しあなたが、その事でそうまでお悲しみ遊ばすなら米吉が申し上げねばならぬ事があります。まあ氣を落ちつけて暫く聽いて下さい。

實は、お妾のことは私は二十年前からよく知つて居りました然し御主人の事なりあなたのことを考へて色々心配もし、盡す事もありましたが、少し考へる事があつたから、今日まで黙

つて居ました。それでも、今日は申さうか、昨日はお話ししやうかと幾度思つたかも知れませぬ。私の黙つてゐた罪はどの様にも責めて頂かねばなりませぬが、私とその二十年間、蔭となりひなたとなつてあなたを保護してゐたことは喜んで頂かねばなりません。丁度今から十年前の事でありました。あの妾が福間家へはいろいろと巧んで、いろいろ計書をしてゐると聞いた私は、非常に驚いて日頃お目をかけて下さる奥様の御恩に酬むるは此時である。命は捨てゝも守護申さねばならぬと決心して私は妾のうちへ行きました。そしてお前は奥様を出して福間家へはいる算段をしてゐるさうだが、もしそんな理不盡な振舞をしたら私が承知しない。是非お前がそうしようとするなら命は

貫はねばならぬと、携へた短刀を見せた事がありました。それが爲めに妾はどうく思ひ止つたのであります。あなたは御存じはないでせうが、私はこうまであなたのお身體を守つてゐるのであります』と語つた。

令室は初めて事情を知ると共に、米吉が二十年來表裏なく盡して呉れた真情が胸に徹し、論して呉れた事が身に沁んで、身の淺間敷いことに初めて氣附かれた。それからは十年以前に亡なられた亡母の事が頻りに思はれ、久遠劫より絶えず守り下さる大悲の親心に想到せられたのであつた。法縁はしきりに重なつて、米吉の至誠も届き、看護にいそしまるゝ身も軽く、常懐の心はつねに寛かであつた。

いたつてかたきは石なり。いたつてやわらかなるは水なり。水よく石をうがつ、心源もし徹しなば苦提（苦）の覺道何事か成せざらんといふ、古きことわざあり。いかに不信なりといふとも、聽聞をこゝろに入れ候はゞ、御慈悲にて候あひだ、信を得べく候。

と、實に古聖は我等を欺かないのである。

令室は度々亡き母を見られた。或時はふと座敷の床の側に母の直立せられてゐるのに驚かれた。又或時は送つて來た手紙の封を切らうとされた時、母はその手を押へて止められた。それは果して心ろよからぬ人から令室へ宛てられたものであつた。

令室が入信せられてからは、五六日の間は三四人の佛様が側

を離れずに慰めて下された、又或時は深い井戸の水を汲んで、目くるめき、腕が疲れた時、誰かゝ手をそへて安々と汲み上げられたこともあつた。實に常來迎である。

四十年の秋、令室は御名號か佛様かを求めて禮拜したいと相談せられた。予は直ちに予の許にあつた御名號に三具足をそへてお届けした。その頃から朝夕の禮拜は勿論、令室の手から珠數の離れた事はなかつたのである。

十方恒沙の諸佛は、極難信ののりをとき、

五濁惡世のためにとて、證誠護念せしめたり。

諸佛の護念證誠は、悲願成就のゆへなれば、

金剛心をわんひとは、彌陀の大恩報すべし。

八 一念の妙趣

八月二十二日、第五回の手術をせねばならぬ事となつた時、岡田博士も、あまり數度の手術であるから、氣の毒に思はれて言ひ出し兼ねてゐられるし、氏も度々の苦痛によつて、根氣も疲れ、毎回の切開に思はしい効果も無い事故歎息の聲を漏して居られたのであつた。さりとて病症は捨てゝは置けず、どうしても施術を敢行せねばならぬことゝなつた。その時予はどうかして氏が岡田博士を信頼し、佛陀の大悲に安住して手術を受けらるゝ様にならねばと思つて、氏の病床に侍して次のやうな話をしたのであつた。

あなたが博士を信頼して、今日迄數回の手術を受けられたその美しい覺悟は、博士の崇高なる人格と、其の巧妙なる技倆、即ち博士が自己の力量のあり丈けを傾注して此の病源を截滅しようといふ決心の一念があなたに感應したからであらう。其博士の自信力は、多年の修學と多年の經驗との顯れである。故に博士の自信力が念々活躍して偉大の力となり、あなたの心に徹して博士を信頼せしむる信仰を造つたのであらう。然し博士が如何に自分の信する所を斷行しやうとしても、あなたが博士を信頼して決心する所がなかつたならば、博士も施すべき術が無いのである。故に博士が第五回の手術を續けて病症を驅逐せんとする確信の一念の出來たのは、あなたが博士を信頼せる一念

の感應であると言ふ事が出来る。それで博士はあなたの信頼により、あなたは博士の確信に俟つて、共に相依る結果、此に第五回の手術が遂成せらるゝのである。そうして見れば、あなたが博士を信頼する一念は、博士が病氣を根治するといふ確信の一念に遡らねばならぬのである。

今佛陀と吾等との間も亦之と等しい。阿彌陀如來は永い間の御修行と、超世不共の別願、即ちお慈悲のあり丈けを傾けて、永劫流轉の難病を殺つてやらうといふお恵みを垂れて下さつてある。吾等はこの佛より外に委せる佛はないのである。救はるべき薬はないのである。故に親鸞聖人は、
是を以て、今大聖の眞説に據るに、難化の三機、難治の三病

は、大悲の弘誓を憑み、利他の信海に歸すれば、斯を矜哀して治し、斯を憐憫して療し給ふ。喩へば、醍醐の妙薬の、一切の病を療するが如し。濁世の庶類、穢惡の群生、應さに金剛不壞の眞心を求念すべし、本願醍醐の妙薬を執持す可き也と勧め給ふてある。而して此のみ佛が、設し凡ての衆生が、永劫の苦患から離れ、迷夢より覺めて、大なる幸福と大なる慰安とを得ねば、吾は一切衆生の救済者大慰安者とは呼ばれまいと言ふ御覺悟から成就せられた救済のみ聲を、宇宙の始め久遠の古へから叫んでゐて下さるのである。釋尊は、『正覺の大音は十方に響流せり』と誠め下さつてある。然し吾等がこの佛陀を信頼し全托する思ひが無かつたら、即ち疑の蓋を覆ふてゐたな

ら、遣る瀨ないみ恵みも徒らに終るであらう。今吾等が信の門を開いて、疑蓋雜はらずに此佛に歸順すれば、佛は直に大悲のみ手を垂れて下さるのである。而して吾等が佛陀に信順するといふのも、阿彌陀佛の正覺の一念が念々活躍して吾等を導いて下さる、即ち佛陀が吾等を救済しやうとして成就せられた、本願醍醐味の妙薬の一念が吾等に感應して、如來に歸順するに至らしめたのである。それであるから無疑無慮、佛願に托した歸命の一念は、難化難治の庶類を度脱せしめやうといふ佛陀の正覺の一念に歸らねばならぬのである。『安心決定鈔』に、

三世の衆生の歸命の念も、正覺の一念にかへり、十方有情の稱念の心も、正覺の一念にかへる。さらに機に於て一稱一念

もといまることなし。名體不二の弘願の行なるがゆへに、名號すなはち正覺の全體なり。くちにとなふるを南無阿彌陀佛といふ。かるがゆへに、心に信するも正覺の一念にかへり、くちにとなふるも正覺の一念にかへる。たとひ千聲となふとも、正覺の一念をばいづべからず。またものうさく懈怠ならんときは、となへず念せずして、夜をあかし日をくらすとも他力の信心、本願にのりおなば、佛體すなはち長時の行なれば、さらにたゆむことなく間斷なき行體なるゆへに、名號すなはち無爲常住なりとこゝろなるなり。阿彌陀佛すなはちこれその行といへる、このこゝろなり。またいまいふところの念佛三昧は、われらが稱禮念すれども、自の行にはあらず。

たゞこれ阿彌陀佛の行を行するなりといふは、歸命の心本願にのりて、三業みな佛體のうへに乗じぬれば、身も佛をはなれたる身にあらず、こゝろも佛をはなれたるこゝろにあらず、くちに念するも、機法一體の正覺のかたじけなさを稱し、禮するも、他力の恩徳の身にあまれるうれしさを禮するゆへにわれらは稱すれども念すれども、機の功をつのるにあらず、たゞこれ阿彌陀佛の、凡夫の行を行せしところを行するなりといふなり。

と仰せられてある。一念の妙趣はこゝである。

今あなたは手術を受けられねばならぬ。それにはどうしても博士を信頼なさらねばならぬ。そうしてその一念の味ひから、

佛に歸する一念の妙味を味はれて、信仰に入られたら、心身共に安住の樂地に遊ばるゝことが出来るであらう。と申した。氏は歡ばれて施術に趣かれたのであつた。

九 悲觀か樂觀か

或時福間氏は、かやうな事を書いて示された。

病者は道理上、悲觀かた樂觀たるべきか敢て問ふ、御高教
勉めて謹聽仕るべし。

それで予は次のやうに答へたのである。

病床に於ける實感としては、時々其様な事も思はれるであら
うが、それは心の持ちやうで、ごうにでも考へられるものであ
る。若し此度の病症が縁となつて、人生の大秘奥の問題を解決
し、佛陀の大慈悲に氣付くことになられたら、此位の幸福な事
は無い。釋尊が悟道に入られたのも、その出發點は生老病死の

四問題にある。特に病氣がその中に加へられてゐることは注意
すべき事である。吾等は無始以來無明煩惱の大難病の爲めに苦
しみ惱んで居たのである。此等の逆縁は却つて佛陀の大悲を信
ずるのには好箇の機會である。然れば此度の病症によつて自己
の過去及現在の罪といふ事に氣付いて、如來の御慈悲を吾身に
引受くることが出来る様になれば、仕合せの中の最も大なる仕
合せである。蓮如上人の御文章に

當年にかぎりて、このほか病氣にかさるゝあひだ、耳目
手足身體こゝろやすからざるあひだ、これしかしながら、業
病のいたりなり。または往生極樂の先相なりと覺悟せしむる
ところなり。これによりて法然上人の御ことばにいはく、淨

士をねがふ行人は、病患を得てひとへにこれをたのしむところをほせられたり。しかれども、あながちに病患を慶ぶころさらにもつてをこらす、あさましき身なり。はづべしかなしむべきものか。

と仰せられてある。此を拜讀すると、法然上人と蓮如上人との病症に對する御感想の一端を味ふことが出来るのである。斯く故聖人が、病症を善用して向上の一路を辿らるゝことは、如何にも尊く氣高いとである。今貴方も、病氣に罹られた事は非常の不幸には違ひないが、然し此病氣によつて人生の大事に徹底し、佛果に進む事が出来れば病氣程尊いものは無いのである。病症を悲觀すると樂觀するとは全く信仰の有無によつて分るゝ

のである。

氏が獲信後予に、『苦痛は病苦の常として怪むに足らず、精神は歡喜に包まれて法悦は依然たり。難有し』と喜ばれ、又泉道雄君が始めて氏の病床を見舞はれた時、『病氣は私の恩人です』と謝せられた。實に偉大なるは佛の善巧方便である。

十 死の感想

病床に反側輾轉して居る氏は、多くの人の死を聞き、或は親しき友の死に遇ひ、或は自分の激烈な苦悶につれて、種々の感想が起り、『此の様に痛疼が烈しくては、到底身の置き所が無い』と苦痛を訴へらるゝかと思へば、又、『此位に苦しみを堪へ忍んで療養を怠らないから、再び健康に復して、自身の職能を全うすることが出来やう』と希望を起され、弱り果てた氏の心には悲喜の陰霧が常で無かつた。はても無い不安の大海原に希望の蜃氣樓を追ふて漂泊してゐた氏は、苦痛、煩惱、人の死友の死の濤に弄ばれて、遂に自身の死といふ暗礁に觸れられた

のであつた。氏は次のやうに書いて示された。

若し死を人間の不幸と稱するならば、余は幸福を享受しつゝある者と言はるゝならんか。去る二月余が病床に入りし以來忽急死の數に入りし人々を算すれば（普通病死を除く）亡友泰巖、森脇喜兵衛兩君の如きあり。汽車電車將た韓國に於ける小戦争等にて落命せし不幸者は擧げて算し易からず。然るに一方余が幸福といふ生存は如何なる者かを述べれば、患部に加刀切開に及ぶ事數度、其苦痛其不安其不快なること、筆紙の盡し得べきに非ず。食する食物に味を知らず。飲む水に渴を醫するを得ず。口舌は破れて言辭を發する能はず。社會より離脱して病床のみに籠居し、生の職責を盡すこと不可能

なる諸點より考ふれば、余の生は幸の生に非ずして不幸の生なりと言はざるべからず。然るに、唯だ朝に夕に勇を鼓し氣を壯にし、以て回春復健の光榮に達せんと、自祈自衛をこれ事とするのみ。若し不幸にしてこの祈念も到達せざる物ならば、實に余が生もはかなきものならずや。

氏は、不幸と呼ぶるゝ他人の死と、幸福と言はるゝ自己現時の生とを比況して、自己の生の頗る價値の無いむしろ他人の不幸と呼ぶるゝ死に劣るものであると考へた。只この生も僅かに回春といふ祈念に維がれて少しの意義を有してゐるものであつたが、優り來る病魔は遂に氏をして、生の覆沒を豫想せしめたのである。八月二十二日、第五回の手術を受けらるゝ際に左の如

きものを示されて家庭の人を驚かせられた。

福間久米吉儀病氣の處、藥石無効、○日○○致候、就而○日郷里廣島にて本葬致候。全體一般の常例に本づき、葬儀當日御報知可仕之處、本人の意志にもとづき、此段事後辱知諸君へ御報知致候也。

但し葬儀當日は、兒等並に親屬のものゝみ會葬に當ること。(會葬の爲め貴重なる時間の空消を見るに忍びず)

追祭即ち年回に當り、兒等處世の美果を得たる上にて、壯大なる祭儀を營むべし。

死後醫家の參照に供せし後、直に火葬に附し、遺骨を廣島に埋葬する事。

八月十八日（老母命日）

氏が聽て遭ふべき死を豫想せられた時は、實に寂寥の極みであつたらう、悲哀の限りであつたらう。然し氏が極善最上の殿堂に趣かるゝ第一の扉はこの時に開かれたのである。右手に必ず盡くべき生を捨て、左手に無量壽の生を取り、廣大會の賑はしさに歡喜する身となる、迷悟の追分に立たれたのであつた。

十一 友情と追福

或時氏は、『佛教には追善供養と言ふことがあるさうであるが、追善とはどういふことか。亡者と佛との差異はどうか。先祖の靈に向つて御名號を稱へるのは如何なるわけか』など、種々の問を出された。予は自力宗と他力宗の追善廻向について少しく答へた。

真宗以外の宗旨では、追福作善追善廻向といふて、三寶供養の善事を行ひ、念佛讀經の佛事を營み、この功德を亡者へ直ちに手向けて、縁なきものには縁を結び、縁ある者には尙々佛縁を厚うするのが自力廻向の追善の意義である。

真宗に於て、年回忌日に當つて、三寶供養の佛事を修め、念佛讀經の法事を行ふのは、何も自力を以て之を亡者に手向けるのではなくて、佛恩報謝の爲めに、如來へこの善事を備へ奉るのであるから、何事も佛恩報謝といふ觀念より外は無ないのである。忌日命日を修するのは、それを縁として法味を歡ぶばかりである。亡者のためにごうのごうのといふ事ではないので、言はゞ其期を選んで自己の信念の増進を計るのである。然し其の愛樂する法味は普遍的のものであるから、必然の結果として法界に遍滿し、有縁の親、妻子、友人のところへ届くことゝなるのである。

無慙無愧のこの身にて、まことの心はなけれども、

彌陀廻向の御名なれば、功德は十方にみちたまふ。

此の『御和讃』の妙趣を味へば、自然に其理を悟ることが出来るのである。無慙放逸の我等、誠の心は露程も無いのであるが、佛陀の大悲を頂いた難有さには、頂いた信心に具する所の大善根が彌陀廻向の法であるから、念佛讀經のお營みにもせよ禮拜供養のお敬ひにもせよ、その行相續の度々に、その功德利益は十方法界に充ち渡り、行相續の度々、如來は恒に御感應遊ばされて、その善根力、その功德力を、親しき衆生に頒ち給ふのである。之を他力廻向の追善といふのである。

真宗には、往相廻向、還相廻向といふ二種の廻向といふことがある。此味はひを話せば真宗の廻向といふ意義が尙よく味は

れやうと思ふ。往とは往生淨土、即ち信心決定して、淨土の往生を遂ぐるを往相廻向と云ふ。還とは生死に廻入し穢國に還來して人天を度すること、即ち彼土に往生した後、再び此の娑婆に衆生濟度に來るのを還相廻向といふのである。曇鸞大師の『論註』に、

廻向に二種の相あり。一に往相とは、己が功德を以て一切衆生に廻施し、作願して、共に彼の阿彌陀如來の安樂淨土に往生す。二に還相とは、彼土に往生し已つて、奢摩他、毘婆娑那方便力成就するを得、生死の稠林に廻入し、一切衆生を教化し、共に佛道に向ふ。若しは往若しは還、皆衆生を抜き、生死海を度す。是の故に廻向を首として大悲心を成就するこ

とを得。

とある。此味ひによつて、佛陀の大悲心に二種の廻向の意義あることを體達することが出来る。尤も『論註』は、一往味へば行者の自利々他の廻向の事を示したもののやうであるが、此の行者の自利々他する事になつた源泉は、佛陀の願心に立ち歸らねばならぬことゝなるのである。彌陀如來の他力廻向の眞實義は此に在るのである。『御和讃』に之を詳かに詠まれてある。

南無阿彌陀佛の廻向の、 恩徳廣大不思議にて、

往相廻向の利益には、 還相廻向に廻入せり。

往相廻向の大悲より、 還相廻向の大悲をう、

如來の廻向なかりせば、 淨土の菩提はいかゞせん。

彌陀の廻向成就して、往相還相ふたつなり。これらの廻向によりてこそ、心行ともにわしむなれ。往相の廻向とくことは、彌陀の方便ときいたり、悲願の心行わしむれば、生死すなはち涅槃なり。還相の廻向とくことは、利他教化の果をわしめ、すなはち諸有に廻入して、普賢の徳を修するなり。若し吾等が、追善廻向といふやうな對他的の同情を起して、自利々他の大行が出来るやうになれば、これ偏へに彌陀の願心より起さしめ給ふものであると慶ばねばならぬのである。親鸞聖人も、

若しは行、若しは信、一事として阿彌陀如來の清淨願心の廻

向成就し給ふ所に非ざることあることなし。『信卷』
 若しは因、若しは果、一事として阿彌陀如來の清淨願心の廻
 向成就し給ふ所に非ざることあることなし。『證卷』
 若しは往、若しは還、一事として如來清淨願心の廻向成就し
 給ふ所に非ざることあることなし。『淨土文類聚鈔』
 と、只啻に佛恩を感荷せられた。それであるから、お慈悲のみ
 親のみ心に契へば何事も如來のお計らひにまかせるのである。
 斯うお話した時。氏は、『終始一貫、恩謝の念を常に斷たず
 感じて居れば、追善供養の必要無きか』と問はれた。その時予
 は、『實にお問の通りであるが、然し吾等は、機根が最劣であ
 つて恒にその念に住して居る事が出来ぬから、善い縁を造つて

佛恩の大作をする様に努力するのである。特に忌日とか命日とか言ふ日を選んで佛事を行へば、一層佛陀の大悲を不實な此心に喚起させて頂いて、報恩行を勵む助縁を作ることが大であるから、其様な心懸けで追福をある特殊の日に營むのである』と答へた。その時氏は首肯かれて、次のやうな依頼をせられた。

一日、日をトして、故森脇喜兵衛、泰巖の兩君の法事を致し度く御知らせ申上候はゞ、御光來被下度、其節は先生に、御讀經御法話を願ひ、聽聞致す積りに候。

予は今日の氏の問が、あまり懸け離れた事の様には思はれて、實は腑に落ちぬのであつたが、この依頼によつて氏の心事をおしはかり、尊敬の念に打たれたのであつた。

十二 撮取不捨

福間氏が信仰といふ事に心を傾けらるゝやうになつてから、予は信仰に關する書物を時々贈つてゐたが、予が訪問する都度氏は氏が味はれた『真宗聖典』や『假名聖教』などの章句に就て、絶對他力の讚嘆をして居られた。

或日子は、『淨土文類聚鈔』の、
 噫、弘誓の強縁は、多生にも値ひ難く、眞實の淨信は、億劫にも獲難し、偶々行信を獲ば、遠く宿縁を慶べ、若しまた此回疑網に覆蔽せられなば、更りて必ず曠劫多生を経歴せん。
 撮取不捨の眞理、趣捷易往の教勅、聞思して遲慮する勿れ。

の文に就て讚仰したことがあつた。
 其際予は一種の靈感に觸れて、文字の一一に祖師の威靈が通ひ、祖師が彌陀の弘願に値れて歎んで居られる有様が、文字の上には活躍して居る様に感せられた。特に弘誓の強縁とが、遠く宿縁を喜べとか、攝取不捨とかいふ文字は活々として、座ろに生氣の浮動するを覺わした。彼の高祖聖人が、津々として盡きざる法味を慶ばれて居られる有様を目のあたり見る様な心持となつて、無心無我に讚嘆して居ると、病人も其際痛く感激されて居られたが、餘程眞摯な態度で、攝取不捨とはどんな事かと、重ねて尋ねられた。予は御聖教の文を拾ふて對へた。
 先づ、『御和讚』には、

彌陀の本願信すべし、
 攝取不捨の利益ゆへ、
 彌陀智願の廻向の、
 攝取不捨の利益ゆへ、
 と仰せられ、善導大師は、
 念佛の衆生をみそなはし、攝取して捨てざれば、阿彌陀となづく。
 と宣ふてある。又、『末燈鈔』の中には、
 攝取不捨事
 たづねをほせられて候攝取不捨のことは、般舟三昧行道往生讚と申に、おほせられてさふらふを、みまいらせ候へば、釋

迦如來彌陀佛、われらが慈悲の父母にて、さまざまの方便にて、われらが無上の信心をば、ひらきおこさせたまふと候へば、まことの信心のさだまることは、釋迦彌陀の御計ひとみわて候。往生の心にうたがひはなくなり候は、攝取せられまいらせたるゆへとみわて候。攝取のうへには、ともかく行者のはからひあるべからず候。淨土へ往生するまへは、不退のくらゐにおはしまし候へば、正定聚のくらゐとなづけて、おはしますことにて候なり。まことの信心を、釋迦彌陀二尊の御計ひにて、發起せしめたまひ候と、みわて候へば、信心のさだまると申すは、攝取にあづかるるときにて候なり。そののちは、正定聚のくらゐにて、まことに淨土へむまるゝとは候

べしとみわ候なり。ともかくも、行者のはからひ、ちりばかりもあるべからず候へばこそ、他力とまふす事にて候へ。あなかしこ〜。

十月六日

親 鸞 御判

眞佛御房 御返事

とお諭し下され、『往生要集』には、彼の一一の光明、十方世界を照して、念佛の衆生を攝取して捨てず。

とお示し下さつてある。と是等の御文についてお話申した時に氏は直に筆を採られて、『攝取不捨は即ち佛なりと味ふて善きか』と問はれた。『さうであります。佛様のことであります』

と答へて、予は、『歎異鈔』の初めを披いた。
 彌陀の誓願不思議にたすけられまゐらせて、往生をばとぐる
 なりと信じて、念佛まふさんとおもひたつころのおこると
 き、すなはち攝取不捨の利益にあづけしめたまふなり。
 氏はつく／＼と誦じてゐられたが、靜に筆を採つて此句に圈點
 を附せられて、猶ほ『攝取不捨は即ち佛なり』と書き加へられ
 喜悅の様が姿に見わたるのであつた。噫、氏の喜悅に先つて大悲
 の尊顔には、いかばかりの笑をたたね給ふたであらうか。

十三 禱り得ぬ心

四十年の十月十二日、氏は第六回の手術後、局部の痛疼絶頂
 に達して、心身の苦悶遣る方も無く、生き乍ら地獄の苦患を現
 在に受けてゐる様に感せられ、不平不満のあまりに、令息甲松
 君を罵つて、『汝の行は偽孝である。己れの許可も得ないで、
 勝手に醫者と相談して、餘計な手術をした。貴様達はよつてた
 かつて、己れを苦めるのではないか』と責めらるゝやうな有様
 であつた。

越えて十八日からは、氏は喘ぎ悶々、疼痛の逼迫はしきりな
 く續いて、看護の人々の心配は一通りでなかつた。まして骨肉

の哀しさには、たゞ人事に見る事は出来ず、父の憂惱は子の悲愁となり、夫の痛苦は妻の身にそのまゝ流れて、かゝる時神佛のみ恵によつて、たゞ一時でも父の病夫の患ひに代りたいとは叶はぬ願ひではあつたが、そのまゝ又切なる祈りであつた。

これまで粉骨細身して病床に侍して、一家團樂のさゝめきに父の健やかな笑顔を見、病床の憂惱は過ぎし日の物語の中に包み度いと、努力に努力を重ねて來られた甲松君は、第六回の手術も其効がなく、父が身を悶へ心を惱まして反側輾轉する様を見ては、慰安の途もつき、希望の光も消へ失せて、神を呪ひ佛を怨まれた。

自分はこれ迄孝道を竭して居る。身心を捧げて療養を盡して

居る、神佛にかくまで禱つて居るでは無いか。噫それになせ孝道の驗しは無いか、療養の甲斐がないか、神佛の御嘉納がないか。この真心からの祈請を、もし神であつたら受納遊ばされる筈である、もし佛であつたら照覽ましますであらう。佛も無い神も無い孝道も役に立たぬ何も駄目である。と、父の面前で手にして居られた珠數を寸断せられた。そして失望の涙にしばらくは身もたゞよふばかりであつた。

床上に鏘然として鳴つた斷珠の響は、甲松君が凡てを破壊し去られた響きであつた。君が絶望の歎息であつた。君が墜落した暗黒の扉の音であつた。此時ふと君が嘗て讀まれた『歎異鈔』の一章が、夢のやうに君の胸に浮んだのであつた。

親鸞は父母孝養のためとて、一遍にても念佛まうしたること
 いまださふらはず。そのゆへは、一切有情はみなもて、世々
 生々の父母兄弟なり。いづれもく、この順次生に佛になり
 て、たすけさふらふべきなり。わがちからにてはげむ善にて
 もさふらはゞこそ、念佛を廻向して父母をもたすけさふらは
 め、たゞ自力をすて、いそぎ浄土のさとりを開きなば、六道
 四生の間、いづれも業苦にしづめりとも、神通方便をもつて
 まづ有縁を度すべきなり。

として一道の光明が燦として君の胸底を射つた。

人力は有限である。自力には際限がある。それで行く所まで
 行き、考へる所まで考へると行き詰つて、絶體絶命の羽目に押

し逼るのである。そしてそこまで押し詰つて來ると、無限絶對
 の他力本願に救はれねばならぬのである。吾等の行ひは、皆始
 めあつて終の無い、虚偽である虚飾である。之を以て究極まで
 押していつて萬事の解決に資するのは無理であらう。

吾等は根底から無價値である。而も罪惡を造る術には頗る巧
 みで、之を自覺もせず、又之から遁れやうともせぬ。これを見
 るに見兼ねて大悲のみ手は火宅の門を叩いて下さるのである。

煩惱具足のわれらは、いづれの行にても、生死をはなるゝこ
 とあるべからざるをあはれみたまひて、願をおこしたまふ。

『歎異鈔』

一切群生海、無始よりこのかた、乃至今日今時にいたるまで

穢惡汚染にして、清淨の心なし。虛假諂僞にして、眞實の心なし。こゝをもて如來、一切苦惱の衆生海を悲憫して、不可思議兆載永劫において、菩薩の行を行じたまひしとき、三業の所修、一念一刹那も清淨ならざることなし。眞實ならざることなし。如來清淨の眞心をもて、圓融無碍、不可思議、不可稱、不可説の至徳を成就したまへり。如來の至心をもて、諸有の一切煩惱惡業邪智の群生海に廻施したまへり。すなはち利他の眞心をあらはす。

『教行信證』

それでも、自覺の無い吾等は萬事に自力を振り回して之で萬事を解決しやうとするから、遂に懊惱憂愁の牢獄へ自らを禁錮して仕舞ふのである。親鸞聖人も二十年間の御修行の努力は最後

に弊履の如く捨て、自らを舉げて佛に全托せられたのである。自餘の行をはげみて、佛になるべかりける身が、念佛をまうして地獄にもおちてさふらはこぞ、すかされたてまつりてといふ後悔もさふらはめ、いづれの行もおよびがたき身なれば、地獄は一定すみかぞかし。

『歎異鈔』

何といふ痛切なお言葉であらうか。甲松君の悩みも、大悲のみ手に抱かれてからは、あともなく消ね失せて、介抱に餘念なかつたのであつた。

君は、看護の暇に、國木田獨歩の『病床録』を讀まれて、感ぜられた所に圈點を施し、或は批評を加へて、其本を予に贈られた事があつた。

余は、蒼茫極り無き天地に介立して、俯仰千古に亘り、大自
 然と相面して、自己の隻影を顧るの時、今更の如く、我生の
 孤獨と荒涼と不安とに堪へず。何物か神秘の方に頼らんと欲
 する情極めて切なり。植村正久氏は、始めて余の心を開ける
 人なり。余の心の合鍵は渠の手に在り。故に余はその鍵を以
 て、余の煩悶より救はれんとせり。生死の境に迷へる余の心
 は、氏の導きによつて、初めて救はるべしと信じたり。氏は
 唯禱れといふ。禱れば一切の事解決すべしといふ。極めて容
 易なる事なり。然れども余は禱る事能はず。衷心に湧かざる
 祈禱は、主も容れ給はざらん。禱の文句は極めて簡易なれど
 も、禱の心は難し得難し。誰か來りて、この禱り得ぬ心を救

はずや。余は衷心より禱を捧ぐるを得ば、その時直に救はれ
 得べきを信ず。

五月十九日午後三時獨歩氏病狀に泣く。

此の一節の上に、

こゝなり。予は此で珠數を切つた。宗教家はどこにゐるか。
 と書いてあつた。責任のある禱りを捧げてその救ひを得やうと
 すれば、そこに蹉跌があるのである。獨歩の苦悶も此である。
 甲松君の苦悶も此である。實に切實なる宗教的情操は、互に共
 鳴を感ずるものである。

普通の人は、一大事に遭遇すると、或は人事を盡して天命を
 まつといふ莫たる諦らめをするか、或は神も佛もないと大邪路

に踏み迷ふか、或は誰か來りて、此の信じ得ぬ心頼み得ぬ心禱り得ぬ心を救はずやと絶叫するかである。甲松君は幸に絶對の信念に住して此問題を切りぬけられたが、獨歩は遂に悶々悶々て死の數に入つたのである。獨り獨歩のみでない。古今幾多の人はこの怨みに惱むて逝つたのである。眞に同情の涙を禁じ得ないのである。

十四 『獲信の記』

甲松君が珠數を寸断して大苦悶に陥られた時は、氏も心身の苦痛に堪へられなかつた時であつたが、甲松君の容子を見て誤解して、『彼は子を捨てたものである。否子を邪魔者視し厄介者視してゐるのである。貴様達は愈々己れを見捨てるのだ』と絶望の身悶々して、『こんな處には居らぬ』と、病床を起たうとさるゝので、看護の人々は驚いてすがりつく、手どり足どりをして種々と慰めるといふ痛はしい有様となつた。氏は此時絶頂に達した病苦と煩悶との爲めに、自失する事も發狂する事も出来なかつた。かくて氏は病床に仰臥し乍ら、醫師も妻子も自分

の身體も當にならない。此世界には何一つ倚賴すべきものは無い。

煩惱具足の凡夫火宅無常の世界は、よろづのことみなもて、そらごとたわごとまことあることなきに、たゞ念佛のみぞまことにておはしますところ、おほせさふらひしか。

といふ御文の意ろが切實に味はれ、其の一刹那、ふと、『予は佛陀が子を助け給ふといふ事を聞きしものに非ずや』といふ念が浮び、思はず念佛を稱へられたのである。

彌陀の誓願不思議にたすけられまゐらせて、往生をばとぐるなりと信じて、念佛まうさんとおもひたつころのをこるこそき、すなはち攝取不捨の利益にあづけしめたまふなり。彌陀

の本願には老少善惡をわらばれず、たゞ信心を要とすとしるべし。そのゆへは、罪惡深重煩惱熾盛の衆生をたすけんがため願にてまします。しかれば、本願を信せんには他の善も要にあらず、念佛にまさるべき善なきがゆへに。惡をもおそるべからず、彌陀の本願をさまたぐるほどの惡なきがゆへの文意が、しみじみと味はるゝやうになり、佛陀の救済が疑ひない事實となり、心中一點の苦悶も無く、病苦も之が爲に輕減し、改悔懺悔の心が起つて平常の短氣も全く起らぬやうになり丸で生れ變つたやうな人となられたのである。斯うして一家は悉く法義を喜ぶやうになり、病狀にはさしたる變化は無いが、法悦歡喜の狀が自ら家内の中に溢れるやうになつた。而して氏

は歡喜に堪へず、病苦の中から筆を採つて、氏が信仰生活に入つた時の状況を記された。『獲信の記』は即ち之である。氏は外國語には非常に堪能であるが、國文は餘り得意で無いから、流麗諷誦に便では無いが、虚街の無い衷心の表白は言々人の肺腑を扶らすんば止まぬのである。

獲信の記

明治四十年十月二十四日は、予にとりて無二の恩謝の日なり。此日は、予が佛陀の恩寵を感得したる、至鴻の紀念日にして、今左に當時を叙するは、世に同惠の慈光に悦浴せらるゝ人の一人にても多からんことを期すればな

臥病十閱月、懊惱苦悶、心意の休憩、何れに依るも要め得るものなし。身體進止の不自由は言ふ迄も無く、食物の如きも漸く飲送して僅に餓渴を充たすに過ぎず。口舌は啞して其用をなさず。抑も余の病症たる、口腔内に發生せる難質の腫物にして、之が治療の初に當り、下顎骨の右方三分の一を切除し、以て全癒を期したりしが、不幸、其効を奏せず。切開又切開、遂に六回に及び、右頬下半部を全く切除し去るの苦痛を嘗む。真に無告可憐の窮狀にあらずや。之に加ふるに、片眼まさに明を失はんとし、且つ耳の下邊は瘀衝を起し、其苦痛の狀、到底、筆紙の盡すべきにあらず。此等の苦痛漸く

滅せんとすれば、又舌根の苦痛之に次で起り、其狀恰も時々刻々余の身體を誅殺せんとするものゝ如し。これ余が現時の實狀にして、之を思ひ彼を考ふれば、現世生存の趣味、何によりてか之を解せん。狂するが如く亂するが如く、この五尺の體軀を如何に處して可なるべきやを知らず。夢の如くにして夢に非ず。我の如くにして我に非ず。進まんか、進むに由なし。退かんか、退くに所なし。斯の如くにして余は實に煩悶苦闘の極頂に達し、人類の失心する、正に此苦痛の一瞬時にあるを思はしむ。

其刹那、其瞬間、ふと『予は佛陀が吾人を助け給ふといふを聞きしものにあらずや』との一念、余が心頭を刺感したり

其は他なし。今春、病臥以來、長子甲松が、余の病苦の狀と精神の煩悶とを見るに忍びず、一日寸時たりとも、心意の慰安を得せしめんと思惟せし爲か、佛界の長老村上、前田、菅瀬、近角、上杉の諸師に枉駕を請ひ、余に法教を聽問せしめしこと屢なりき。これ余がこの苦悶の瞬時、圖らず佛陀の救濟を感想したる次第なり。而して此一瞬時の回想により、今までたへ難かりし迷苦煩悶は頓に余の心頭より回散して、余は期せずして夢の如く。自然と口に南無阿彌陀佛の名號を誦唱したりき。噫。

至大無上のこの光景を描寫する如きは、遺憾ながら余に其文字なし。たとひ余に文章の才ありとするも、尋常の人事に

非る此感想を描寫せんは、不可能のことなるべし。故に余は唯其概容を叙するのみ。

斯の如く、余は佛陀の喚起（余はこれをかく信ず）に依り煩夢否煩惱より醒覺して以來、寂寞慘憺たる四面は、遽に樂境の春風と變じ、觸目耳聞、一として平安ならざるはなし。身は久しく重患の包圍する所となり、今現に其苦痛に惱殺せられつゝあるも、佛陀の慈光に照耀せられたると同時に、恰も病患は拭消せられたるが如く、精神は平然として全く患苦を忘れ、現在確實に前途の光明の赫々たるを思念し、誠に心意の安泰、比するに物なし。この忽移急變に對しては、眞か夢か、有か無か、將た余は今本心を顛失せしには非ざるかと

怪疑すること一再に止まらず。熟思靜慮、二夜に及び、初めて知る、余は正しく佛陀の膝下に攝取せられ、佛陀の本願に副ひ奉り居りしことを。

茲に至つて余は思ふ。この病患なればこそ、この絶對無邊の大悲に浴し、萬世不滅の慰安に坐し得るに至れりと。嗟。余は何たる多幸ぞ。この清淨なる佛界の人生を味はひ得るに至れるを思へば、過去五十年の前身、消れて幻の如し。罪惡深き余、汚濁不淨の余をして、今此特寵此慈悲に感せしめ給ひしことを思へば、誠に懺悔の情にたへざるなり。

十五法 悦

福間氏は、佛陀の大悲に攝取せられてから、觸光柔輓の本願が顯はれて、平素の短氣も全く起らぬやうになり、法悦歡喜の裡に靜かに病を養はるゝことゝなつたので、岡田博士を始め、其他の人々も、氏の人格が一變して、温乎玉のやうな人となられたのに驚かれた。嘗て看護婦長が予に向つて、『福間さんは初めは随分困りました。何しろ萬事御自身でお指圖をなさいますして、私共の申す事をお聞き入れになりますので、病院にはいられたら、病院の規則でありますから、私共の申す通りになすつて下さらないと困りますと、再々申し上げた位でありま

したが、宗教を聞かれるやうになられてから全く動作のお變りになつたのには驚きました。そして今更のやうに、しみじみ信仰の力の偉大なことを感じました』と語られた事もあつた。轉惡成善の眞の味ひは此にある。氏は心のよろこびを時々書いては示された。

○ 幸か不幸か、今回病床に臥して以來、恥しながら始めて死なることを知れり。今日の御高教にて、精神上光明の一端を知悟するの期を得たるは、これ貴君の賜也。

○ 今日、初めて靈勅なる語を知り、歡喜極りなし。

佛陀の恩澤に浴してより、余が心は平なり。静なり。廣きなり。高きなり。然し余が前身は、俗の俗、塵の塵、埃の埃なりし也。

○ 令息に對して、

汝が母は、度々懇切に、安んじて他事を考ふる勿れといへども、昨今の苦痛は、他を考ふる餘地無き程の苦悶なり。たとひさなくとも、一心に佛願に依頼したる今日は、他の事も心を苦しむることなし、安心あれと告げよ。

○ 余が今、佛教仰信者となり、心を清くして日々邪念と離れつ

ゝあるは、甲松が至孝の賜なり。

○ 御蔭にて、佛恩に浴することを得たるは、無上の幸福と存じ奉り候。幸にして快復致し候は、御高教の下に餘命を奉じ度き志願に候。

○ 世は余を目して、盲信者といふならん。余は唯だ馬車馬的にして、他を見るの暇なし。

○ 發病以來、余は地上の野心と苦念とを離脱して、今は安心と満足とを以て、頗る愉快に日を迎送しつゝあり。是れ余が體力

と、御佛の教へに謹服したると、足下等三兒の賜なりと、心中大に感謝しつゝあるなり。

○ 一番快樂なる時は、乾燥したるガーゼと取替へたる場合。一番不快なるはガーゼの濡れたる時なり。其時は微痛斷じざるなり。快樂の時も不快の時も、ともに佛恩の稱名を想起させて頂くなり。

○ 先般最も苦痛を覺わし時と、其程度は優るとも劣らざる苦悶を今嘗めつゝあるなり。唯だ苦悶の狀況が、外部に已前の如く顯れざるは、如來の御袖に縋りて、其慈光の御蔭によつて

心意を慰すること大なればなり。

○ 余に、周囲の温情なかりせば、余に、宗教の光なかりせば、今日此頃は、精神狂亂の悲境に呻吟し居るならんと思ふ。見よ、余の平素を知れるものは、眞に同情に堪へざるべし。余は人に屈せず、人に媚びず、所信以て處世の鑑となしたり。之を悪評せば、或は我儘に近からん。其我儘を以て此究苦に坐す其心中諒察せられよ。

○ 余の今日は、余に非常の大悟あり。

妙な時に佛恩が特に思ひ出さるゝものである。腫物を切斷した頬の下半分の穴の中へは、澤山のガーセを入れてある。之を引き出す時、肉が附着してゐるから、生爪をはぐやうな痛みを忍ばねばならぬのである。自分がそのガーセを取り替へて貰ふ時は、この世でいへば愛らしい子供心のやうになり、來世でいへば佛のやうになつて、たゞ稱名ばかり口にするのである。それは、佛の保護があればこそ、痛苦もこれくらゐですむのである。若し佛の保護を得ぬ世の病人ならば、必ずこれ已上の病狀に陥つて苦悶するであらうと思ふと、その都度佛恩の難有さが胸にせまつて、稱名がまろび出るのである

○

手術臺に上り、面を白布に包まれたる時、是より吾身が如何になり行くべきかと思へば、實に慘然たるものなり。然し佛の力により、余は平然たるを得。

○

塵の世の夢醒めて、佛陀の慈光を感得したるは、すべて佛陀の力にして、更らに己の力にあらず。されば慈悲の光に浴する身となりしとて、人に誇る程の事にあらず。佛陀の招きによりて樂しき人間の道を辿らせて頂く事は、別に不思議にあらず。さるを人間以上の事を爲せし様に思ひ、信仰告白なんごゝ申して人に示すは、名を銜ふに似て心恥かし。以後若し人に示す様のこともあらば、法悦に入りし後の所感とか何と

か、別名のもとに掲載せられたし。
 予は『信界美譚』といふ様な名を掲げて、氏の信仰の經歷を『警世新報』に載せたのである。氏がこの片言隻語の中にも、十分慈光の下に身を置く人の心懸が窺はるゝではないか。己れ賢として實利生活に安んじ、自ら汚れたる迷ひの中に在ることを知らなかつた者が、一度慈悲の光に觸れて我身の眞の價値が知らるゝ様になると、斯様に人が變るものであるかを思はざるを得ない。凡夫を凡夫と知り、罪の子を罪の子と知つたのは別に不思議はないといふ心懸けには、高いみ法を仰ぐ法の深信も、卑しい我身を遜る機の深信も備はり、尙ほ之から清い麗しい生活に進むといふ向上の殊勝さも顯れて、尊いことである。

○
 氏が現在病苦の中に在つて法味を味はるゝ有様は、實にたゞならぬものであるが、然し未來の觀念はごうであらうかと、予が未來に對する考へを尋ねた時、氏は次のやうに書いて示された。此の不潔なる衣を着、この不淨なる煩悶界に居りながら、この安らかなる樂しき日夜を送り迎へ居ることなれば、この衣を脱ぎこの現在を後にせば、廣き清き佛陀の世界に往生する事は疑なし。これ余が來世に對する信念なり。

○
 又令息に對して、

昨夜よくよく考へ見るに、余が體力は不思議に強健なるもの

に相違なし。この重患を病み、直行車に乗りては、睡眠薬に依て漸く眠ることを得る程の老夫が、停車場より高橋病院へ歩行し得ること等を考察すれば、決して重病者とは見わざるべし。余にして今一層元氣にてあるならば、或程度に於ては普通無病の人と變りなかるべし。然るに、健康普通にしてこの病を患ふ人あらば、病中余の如き活動の出來ざるべきは勿論、疾くこの病魔に打ち勝たれ居りしやも計り難し。彼此思を回らすに、余の今の状態は、佛陀の恵みを垂れ給ひたる外ならざるべし。

○
四十一年二月、第八回手術後見舞の際、氏は次の如く喜ばれた

り。

苦痛は病苦の常として怪むに足らず。精神は歡喜に包まれ、法悦は依然たり。難有し。

○
此の苦患に座せざりしならば、精神上の余が現時は如何ならん。この重患に病む余が現時の精神如何。

病患の賜は、

- 一、佛陀の大悲に浴したる事。
- 二、人倫を徹底して解悟したる事。
- 三、醫界に貢献したる事。

十六 傳道の感

氏は獲信後、傳道の事について頻りにこういふ事をいふて居られた。

『世人が動もすれば、宗教の信仰を以て不健全なものと思ひ唯だ一時氣休めのもの位に思ひ、現在活社會に立つものには不必修だと定め、宗教などは愚夫愚婦の信すべきもので、今日の教育を受けた新智識ある者の信すべきものでないといふ考へをもちたがるが、之は信仰に經驗の無い門外漢の空論で、事實さういふ譯のものでないと言ふ事を深く感じた。自分は多少の教育を受け相當の常識も持つて居る積りである。そして口だけ

は癩の爲に痛むが、身體は至つて健全であり又頭腦も明晰である。決して一時の熱に浮かされて、無暗に迷信した譯ではない若しも幸にして治療が効を奏して生命を維ぐことが出来たならば、此の片輪の醜い顔を下げても構はぬ、宗教は智者も愚者も等しく信じ得べきもの、信せざるべからざるものといふことを世人に知らせたいと思ふ。此の尊い佛陀の教が愚夫愚婦へばかり傳はつて、智者學者、一般教育ある中流人士の間にあまり傳はらないといふのは、如何にも残念である。どうかして、佛教に遠ざかつてゐる人達に、聞法の縁を結ばせてやるやうに努めなければならぬ。自分も今迄は、布教とか傳道とか、普通僧侶方のやつてゐる事を、極めて冷淡に眺めて居たが、今になつて

考へて見れば、深く布教傳道の必要を感ずると共に、今の宗教界には眞の布教家の至つて乏しいことを遺憾とする。大體、僧侶も牧師も寺院や教會を多くは衣食の爲に利用しては居ぬか。世の爲め人の爲めに利益を與ふるやう、宗教を活用するのが當然のことであるのに、現今のやうに自己の衣食の爲に宗教を商賣道具にして居ては、どうしても眞の感化は覺束ない。我々共が斯ういふ事を申しては失禮か知れぬが、眞面目に考へるごとうしても斯様な感じがして心配でならぬ。自分が萬一餘命を繋ぐ事が出来たならば、何か佛法弘通の御手傳をして、御報謝の一分を盡したいと思ふのである』

十七 現在に入用

四十年の十二月に、氏の友人である、大阪の代議士砂川雄氏が見舞はれた、かねて福間氏が性急であることを知つて居られたのであるから、病床に仰臥して居る氏を見て同情に堪へず、『病中さぞ御退屈でしやう』と慰められた。その時氏は、自ら書かれた彼の『獲信の記』を示された。砂川氏はそれを一讀せられた後、『これは至極難有い事である。どうしても死ぬることになれば、これ位の諦らめと覺悟がなくてはならぬ。これなれば、死ぬる時も餘程樂であらう、死んだ後も極樂に往生するに違ひない。誠に仕合せなことである』と話されたさうである。

それから三日後に予が病床を訪れた時、氏はその時の話を持ち出して、『世間の人は佛教を誤解して居る。自分も宗教を聞かぬ前は、砂川君同様の考へであつた。極樂参りの爲め、死ぬ時の爲め、一時氣休めのものに考へてゐたが、今となつて見れば、實に大なる誤解であつた。自分があの時痛みがなかつたら、充分砂川君の誤解を説く積りであつたが、折悪しく痛みが烈しかつたので、残念ながら只黙して聞いて居た。佛教は死ぬる時、死んだ後ばかりに入用なもので、一時氣休めのもの位の閑問題では無い。現在に佛の大慈を感じ、時々刻々大悲の如來と共にあつて、現在その如來に慰められ勵まされて居るのである。それを氣休め位に思つて居るのは、眞の味ひを知らぬとは

言へ、實に氣の毒に堪へない次第である。布教をなさる方々はこんな人を相手にお諭しなさるのであるから、さぞ御困難でしやう』と歎息せられて居たのであつた。

十八 歳末の記

四十年の暮であつた。一日氏は歳末の感を話された。之れは他の健康な人は、或は馬車や自動車や人力車で諸方面に活動して、一日に何萬圓といふ取引をしたり、又盛んに金儲けの話などを話したり聞いたりするのに、自分は病氣の爲めに徒らに苦しめられ、一年餘も病床にあつて家族や他の人々に心配をかけ世話になつて居るから、壯健で働いて居る人を羨しく思ひ、我身の境遇を考ふれば失望の念がむらくと湧き出づるのであるが、然し其刹那み佛の覺醒によつて、前の妄念が忽ち消れて、一種言ふべからざる快感が胸の中に閃いて、我身の幸福が慶ば

れ、若し此病氣に罹らなかつたならば、如來の御慈悲に氣付き法悦歡喜の日暮しは出来なかつたであらうと、妄念が起つてもすぐ大悲の親様の許に立ち歸つて佛恩を歡び、稱名相續させて貰ふのは、我ながら愉快に堪へられないと喜んで居られた。予は共々に尊い御慈悲を喜ばして頂き、故聖の法語をしみじみ味ふたのである。

人の身には、眼耳鼻舌身意の六賊ありて善心をうばふ、これは諸行の事となり。念佛は然らず。佛智の心をうるゆへに、貪瞋癡の煩惱をば、佛のかたより刹那にけし給ふなり。故に貪瞋煩惱中能生清淨願往生心といへり。『御一代聞書』攝取の心光は常に攝護したまへり。既に能く無明の闇を破す

と雖も、貪愛瞋憎の雲霧は常に眞實信心の天を覆へり。譬へば日光の雲霧に覆はるれども、雲霧の下明かにして闇なきが如し。

『正信念佛偈』

煩惱に眼さへられて、攝取の光明みざれども、大悲ものうきことなくて、つねに我身をてらすなり。

『和讃』

處が歳末になつて、家族の人々が永い間の看護で嘸困りもしたろう、又色々の感想も持つても居るであらうと察せられて、家族の人々を集めて、永の月日至り届いた看護の禮を述べ、歳暮に對する一同の感想を一々聞かれて、最後に、自身の感想は斯うであると、『歳末の記』を示された。

歳末の記

自分は片眼を失ひ、口も利けず、一耳亦用をなさず。絶わざる痛みに苦しみながら、今度はくはと回復を豫期して、七回の手術を受けたる今日にても、猶快復の期知り難し。然らば、余が妻余が子の情として、余の此病狀に同情を寄する事決して少からざるべし。然れども、佛の袖にすがり、佛の慈光に包まれたる今日の余は、心安らかに、高く且つ廣き地にある故に、佛恩を感謝する外、少しも不足不平を感ずることなし。余にして若し此病氣に罹ることなからしめば、或は今此頃は、百萬の富を積むを得、その財寶の爲めに、世俗の

名を高め得たるやも知るべからず。若し然らば、其富に頼りて、余が子孫は奢侈に耽り、余も現世生存の趣味を解せずして終り、又其臨終に際しては、苦惱煩悶の中に其命を了することなるべし。然るに幸にして、此病苦に依り、佛恩の宏大無邊なるを味ひ得て、靜安平易の裡に日を送るを得るは、余の最も幸榮とする處也。

若し此病なく、此幸福なく、無趣味平凡、昨年之如く健全ならば、利慾を以て、來問すべき輩のみなるべきに、現時にありては然らず。一方、余の病患に對して、誠心誠意より同情を寄せらるゝ多くの人を得、又他方には、余が信心歡喜の狀態により、同行なる未見の知人をすら得るに至りしは、誠

に余の多幸にして、一念、此佛恩を感想すれば、病氣より來る苦痛不自由の如きは、少しも余を煩はす事なし。

汝等は、余の病氣を憐み、又看護に餘念無きが故に、歳暮に際し、何等世俗の行事にたづさはることなく、又迎春の準備をなさるが故に、恰も不幸なる新春を迎ふるが如き感あるべしと雖も、實は然らず。この送歳迎春の樂の如きも、決して物品の贈答などにのみ心を奪はるべからず。其等のことは唯虚禮のみ。空想のみ。之に反して、無量無限の慈悲を戴きし此歡喜の心中は、平安にして、四圍は皆靜穩の間に、佛と共に此新歳を迎ふるを得るは、過去幾十回の越年に比して無二の幸福なるを喜ばざるべからず。此歳暮に當り、決して

汝等の誤解によりて、悲しむべき新春なりとの考を起さるる様、一言の注意を與ふ。

余は兒等の父として、夙に龜鑑たるべきを庶幾ひたるも、未だ嘗て其事蹟無かりしを恥ぢたり。然るに今回、佛陀の慈光に歡喜するの一事は、慥かに汝等の龜鑑たるべきを信ず。病苦久しくて、難澁云ふべからざる中に在りて、猶心安らかに清き日を送りて、何等不安の念なきは、安く如來の恩徳に浴し、法悦に呼吸する賜なり。汝等子孫、決して忘却する勿れ。

明治四十年十二月

十九 未見の友

予が年末に病床を訪ねた時に、氏は一葉の寫真を示して、『これを見ると南無阿彌陀佛が喜ばれる』といふて、予に渡された。それは富嶽を背景として寫された帝國軍艦の雄姿であつた。然し此の寫真丈では氏の言葉の會得も出來なかつた。その時氏は静かに裏を指された。予は直に裏を返すと、次のやうな文字が認めてあつた。

麗はしき御信仰の程、屢々警世新報誌上にて拜見仕り候。劣機の私共、只だ羨望の至りに御座候。私の幼年の頃は、祖父に連れられて無意識に佛に額き居たりしに、稍長じては念佛

の念も無く暮し候。日露の役、征途に上るに及び、死の恐ろしさとも言ふべき觀念より、再び彌陀に合掌する様相成り候。爾來思想に多少の變化もあり、隨犯隨識ながら念佛致し居り候。目下の念佛は、死の爲めに非ず、生の爲めに非ず。我れあらん限りは、念せざるべからず。稱名は絶對の尊號なり命令なり。命令は絶待なり。服従せざるべからず。佛の靈光に照されたる我を慙ぢ、我の存在を謝し、一念稱名によるの救濟を感謝するのみと考居り候。盟友村上氏より承り候へば、御病氣も輕からず被爲居候由、御氣毒至極ながら、是の良機を得て美しき信仰に入られ候こそ、實に慶賀すべきこと、存候。此寫眞は我乗組の宗谷（仁川にて撃沈せられしワリヤ）

ク、清水港碇泊中撮影せしもの）に候。敬意を表し度く進呈仕候。御一覽の榮を得ば幸甚に候。

四十年十二月二十二日（第二十四回の私誕辰）

宗谷乗組員中 軍醫 ○○○○

予は思ひ懸も無いこの難有い法語に接して、再三繰返して佛恩の廣大なことを喜ばして頂いたのである。後に、警世社同人から、彼の軍醫は長い間、警世の愛讀者であると聞いた時、此の未見の友を一入床しく懐かしく思つた。その後同氏とたよりをすることが出来、同一念佛の尊い縁を結ぶことが出来た。そして次のやうな御手紙を下さつた事がある。

過日は懇篤なる御手紙を賜り、誠に難有う存じます。先頃は

演習がありましたして、行動中にて音信思ふに任せず、不本意ながら失禮致して居りました。不惡御省恕を願ひます。二十日演習終結し、横須賀に碇泊してから新聞を見まして吃驚、福間氏は三月十七日に死去されたさうであります。お悼しい事を致しました。然しあんな美事な御信仰でもあり令息方が皆孝順で居らつしやる様でもありますから、嘸かし安らかに成佛せられた事だと思ひます。御手紙と福間氏からの冊子等は今十七日に接手したのです。同日は本艦が交戦中、潜水艇の襲撃を被つた所の廢艦と假定され、戦列をば出たのでありません。御手紙で諄々と御指導下さいまして、感謝の辭も御座いません。私は御蔭で、阿彌陀佛の擁護を忝ふして居るのだ

さうであります。靈光の中に生活してゐるのださうです。けれども、折々ほんの折々しか感謝の念佛を稱へぬ、まあ言はゞ横着者であります。自ら省みて觀察しますと自分ながら恥かしいやうな事ばかり仕て居り、又考へて居るので御座います。況んやあなた方から御覽になつたらば、寧ろ憫然な奴だと思召されるでありませう。信仰の實感なんぞ申す様な境界で無いので御座います。多少、佛の存在人の價值とでも言ひますか、まあそんな事を念頭に置く、即ち信仰の萌（聊か不當かも知れませんが）と言ふやうな事も、私の方には見當らないのであります。若しあれば、それは御導きなのでしやう然し咄嗟に信心決定なんかと云ふ様な事は全くありませんで

した。強いて求むれば家庭で滲潤したとでも言ふべきかと思ひます。(中略) 親は、所謂御同行衆の様に、やれ私は信心が確か、やれ安心を戴いたのと騒ぎは致しません。阿彌陀佛の勅命を、はい／＼と合點が行けばそれで結構。只だ頼めの仰せの儘だ。念佛を稱ふべしだ。自ら己の信心だ安心だど肘度するに及ばぬといふ御考へらしいです。私も多少は覺悟も無いではありませぬけれども、御聞を煩はす様な事は御座りませぬ。未だ實際のところ、充分にわかつて居ないのだと思ひます。今後は聊か修養したいと思ふて居りました其折柄御手紙を頂きまして好機を得た事を喜んで居ります。御辭に甘へ上京の節は御邪魔に出ますから、何卒御指導の程、くれ

ぐれも御願ひ申して置きます。亂筆御免。

〇 〇 〇 〇

菅 瀬 先 生 様

『同一念佛して別の道無きが故に、遠く通ずるに四海の内皆兄弟となすなり』といふ古聖の言葉は限り無い心強いお慰めである。『一世は勤苦なりと雖も須臾の間なり』とお慰め下さつたその須臾の間にも、また勤苦の間に／＼同一念佛の友がつぎうて、心ゆくばかり無蓋の大悲を讃仰させて頂くとは、何と言ふ貴いことであらうか。福間氏の獲信によつて未だ見ぬ友は心ばかり一つ所に集ふたのであつた。その中に海軍の士官候補生故中村吾一氏も在られた。

同氏は明治四十年、江田島海軍兵學校卒業後、遠洋航海の途に上られ、印度洋上で、『求道』に紹介してあつた福間氏の入信の経路を読み、歡喜のあまり、令息甲松君に手紙を送られたのであつた。

バダビヤからマニラに向ふ航海中、三月の求道雜誌で貴家の御事を拜見致し燃ゆるが如き熱情、抑へんとして抑ふる能はず、幾度か日本の空を仰いで念佛を稱へ、何とも言ひ様の無い感涙に咽びました。御尊父様の如き七顛八倒の御苦痛の中に在つても、佛様の大慈光に浴する事が出来るとは、何といふ不思議な難有い事でありませうか。又御母上様も御入信遊ばされたさうな、私は失敬ながら、丁度自分の父母が信仰に

入つて下された様に嬉しく、獨り膝をポン／＼叩いて、雲山萬里の南方から喜んで居ります。實際飛び立つ様に、だきつく様に嬉しくて堪りません。獲信の記を今夜拜見いたしました。誠に善き教を受けました。私などは、未だ／＼不幸にして苦勞のしかたが足らぬと見え、信心決定の樂天地には届きませぬが、何れ絶わざる佛の慈悲によつて、向上させて頂く事と心安く喜んで居ります。誠にあつかましく、實は出狀を幾度か見合せましたけれど、佛陀の御手許には、皆様は私の父であり母であり兄でありますから、遠慮なく拙筆を以て聊か所感をのべ、貴家の爲め雙手を舉げて御祝ひ申す譯であります。今頃は御父上は佛様の御招きによつて、御旅立遊ばさ

れたかも知れんと存じます。然し何も彼もあなたまかせです
から安心なものでありますね。初めての手紙に餘りおこがま
しいから、此で止めます。嬉しさのあまりに。

四月十七日一時半

マニラ港にて 中村 吾一

氏は此手紙を認められてから丁度十三日目の四月三十日の曉
がた澎湖島馬公港沖で、松島艦の沈没と共に溘焉として佛陀の
み國へ往生せられたのである。氏の死後數日を経て甲松君はそ
の手紙を手になされたのである。

蓮如上人仰せられ候。信を獲つれば、さきに生るゝ者は兄、
後に生るゝ者は弟よ。法敬とは兄弟よと仰せられ候。佛恩を

一同にうれば信心一致の上は四海みな兄弟といへり。
蓮如上人順誓に對し仰せられ候。法敬と我とは兄弟よと仰せ
られ候。是は冥加の御事と申され候。

『如上人御一代聞書』

これは經の文なり。華嚴經に言、信心歡喜者與諸如來等とい
ふは、信心をよろこぶ人は、もろくの如來とひとしといふ
なり、もろくの如來とひとしといふは、信心をわてことに
よろこぶひとを、釋尊のみことには、見敬得大慶、則我善親
友とときたまへり。また彌陀の第十七願には、十方世界無量
諸佛、不悉咨嗟稱我名者、不取正覺とちかひたまへり。願成就
の文には、よろづの佛にほめられよろこびたまふと見たり

すこしもうたがふべきにあらず。これは如來とひとしといふ文ともあらはししるすなり。
 『末燈鈔』
 利得を離るれば、昨日の親友今日の讐、芳醇を酌んで互に談つた百年の知己も、途に逢へば悠々たる行路の客、實に冷かなこの世上に、未だ見ずして而も相逢ふものに勝る、脈々たる信仰の春風は今生を吹き來世に流るゝ、實にこれが眞の兄弟であり之が善親友である。

二十 佛陀より預る身體

四十年の暮二十八日、氏は神戸に歸つて新年を迎へられたが一月の七日頃からまた痛みが激しくなつたので、東京から、岡田博士の助手村山氏を呼んで診察して貰はれると、また腫物が出來てゐるので、第八回の手術を受けられねばならぬことになつた。然し度々の手術であるから家族の人は勿論醫師も氣の毒に思はれてそれと云ひ出し兼ねて居られたが、病人は却つて平氣で、村山氏や家族の人々に次のやうに書いて示された。

去年すでに皆さんと別れねばならぬ筈であつたのに、佛の御護りにて、この楽しいき新年を迎ふことゝなつたは誠に仕合

せである。されば何時かは佛陀の御國へ行く身なれば、この病床に苦んで居るよりは、早く迎へ下されて御膝元へ召し寄せ給ふみ心で在すかも知れぬ。それ故、皆さんと案外早く別るゝかも知れぬ。余はこの覺悟で食物も、養生も、すべて人後に落ちぬ様勵んで居るのである。いよく佛陀の御呼びに預る迄は、この身は佛陀のお身體である。決して粗末には出来ぬと思つて靜養して居るのである。余はかゝる覺悟であるから返すんゝ予が面前で一滴の涙も流すものでない。

年末から廣島の自坊に歸つて居た予も、歸途神戸に立寄つて法悦の期を得たいと楽しみにして居たが、氏も亦切りに予の着神を待たれて居た。が遂に神戸で相遭ふの喜びも無く、十六日

に歸京された氏を、二十日の手術前に予は訪ねた。その時氏は予が如來の御迎へに預るは、何日何時なるかは、人間の知り得る所にあらざれども、予は病苦の進むに従ひ、ますゝ佛恩の厚きを考へ感謝を述ぶるに辭無き次第なり。特にこの五尺の身體は、我身にして我物に非ず。全く佛陀よりの預り物なれば、一指たりとも粗末にすべきにあらず。たとひ今夕御召に預り、御迎へにあふとも、その瞬間迄は、成る可く大切にして、寸分たりとも御法に背きてはならぬと、心中に戒心し居る次第なり。

と書いた覺悟を示されて、靜かに手術臺に上られたのである。

二十一 美しい臨終

氏の病氣は三月初旬から革まつて、時々昏睡に陥つて神経の知覺を失ふやうになられた。醫師よりは注意をせよといふ警告があつた。三月八日、予は氏の耳に口を寄せて、何か短くて難有いものを読みましやうかと尋ねたら、首肯せられた様であつたから、聖人一流の御文章を拜讀した。處が少し分つたと見えて袖の中から珠數を出して頭に戴き、佛陀の大悲に救はれ光明の中に臥してゐるから大丈夫であると歎ばれる模様がありくと姿の上に顯れた。其時甲松君が床の側から、『苦しい時に御念佛を稱ふれば樂になります、實に難有いことであります』

と喜ばれた。所が思ひがけなくも氏は病苦の中から、『甲松の念佛と己れの念佛とは念佛が違ふ』と叱咤せられた。この兩三日間は氏は全く感覺を失ふて何事も分らなかつたのであるから此一言を聞いて病室にある人達は皆大いに驚かれた。氏は嘗て『苦痛は病苦の常として怪しむに足らず。精神は歡喜に包まれて法悦は依然たり』といふ美しい信念に住して居られるから、一時の氣休めや病苦を通れる爲の念佛ではなく唯だ絶對他力の救濟を感じ佛恩報謝の念佛を味ふて居られるから、惡しく取れば自力にも通ふ甲松君の言葉が氣に入らなかつたのであらう。然し甲松君は只尊い父の喜びの相を眺めて、感謝的に言はれた迄であつて、別に深い考へがあつて言はれたのでは無かつた。

此の明確な言葉を聞いた予は、今更乍ら信仰の威力を感せずには居られなかつた。實に一度佛願に全托して絶對他力に歸入すれば、如何なる變時があらうとも初めて得た所の信仰は確乎不動である。平生業成とは、何と言ふ尊い言葉であらうか。

聖人親の御弟子に、高田の覺信房大郎入道といふひとありき。

重病を受けて御坊中にして獲麟にのぞむとき、聖人親入御ありて、危篤の體を御覽せらるゝところに、呼吸のいきあらくしてすでにたねなんとするに、稱名をこたらずひまなし。その時聖人たづねおほせられてのたまはく、そのくるしげに念佛強盛の條まづ神妙たり。たゞし所存不審いかんど、覺信房こたへまふされていはく、よろこびすでにちかづけり、存せ

んこと一瞬にせまる。刹那のあいだたりといふども、いきのかよはんほどは、往生の大益をわたる佛恩を報せずんばあるべからずと存するにつき、かくの如く報謝のために稱名つかまつるものなりと云云。このとき聖人親、年來常隨給仕のあひだの提撕そのしるしありけりと、御感のあまり、隨喜の御落涙千行萬行。『口傳鈔』

我すでに本願の名號を持念す。往生の業すでに成辨することよろこぶべし。かるがゆへに臨終に再び名號を稱へずともまた死縁無量なり。やまひにおかされて死するものあり。つるぎにあたりて死するものあり。水にをぼれて死するものあり。火に焼けて死するものあり。乃至寢死するものあり。酒

狂して死するたぐひあり。これみな先世の業因なり。さらにものがるべきにあらず。かくのごときの死期にいたりて、一旦の妄心をおこさんほかは、いかでか凡夫のならひ、名號稱念の正念もおこり、往生淨土の願心もあらんや。平生のとき期するところの約束、もしたかは、往生ののぞみむしかるべし。しかれば平生の一念によりて往生の得否はさだまれるものなり。平生の時、不定のおもひに住せば、かなふべからず。平生のとき、善知識のごとばのしたに歸命の一念を發得せば、そのときをもて、娑婆のをはり臨終とおもふべし。

『執持鈔』

十二日には愈々危篤に陥られて、脈も薄らぎ心臓の鼓動も幽

かになつたから、家族の人々は禮服に更へられ予は原禮子夫人の齋らせられた阿彌陀如來の尊像を床にかけて、『阿彌陀經』と氏の『獲信の記』及『歳末の記』を拜讀し、氏の遺志に基いて、別れを告げる爲めに將にシャンパンを酌まうとした。その時又鼓動も確かとなり呼吸も通ふやうになつたと言ふので、それからは何時異變があるかも知れないと、皆々病床に詰切つたのである。

かの忠僕米吉は、電報で神戸から呼び寄せた十歳を頭に四人の子供を主人の枕邊につれて行つて、『皆のもの、手をついて長い間御親切に御世話になつた御禮を申し上げよ、もう再び御主人様にお目にかゝる事は出来ぬぞ。よく／＼お顔を拜んでお

け』と慙ろに申し聞かせた。父の悲痛な言葉に催うされてほろ／＼と涙を流す子もあつたが又全く頑是ない子もあつた。予は此の光景に胸が塞つて思はず暗涙にむせんだのである。米吉は予に向つて、『かうして教へて置けば、後になつて子供の腦に幾分覺わがあるであらう』と語つてゐた。

十三日から十六日まで毎日一度は、もう命終であらうと側の方々が覺悟をされる事があつたが、其都度前と同様なことを繰返された。助手の大久保氏も、『自分も澤山病人に接したが、福間氏のやうな人は初めてゝある。脈もあがり心臓の鼓動も止つてゐるがまた息を吹き返さるゝ事が數度あつた。どうも不思議の事である』と談して居られた。然し十七日午後七時五十五

分には遂に安らかに母上の待ち給ふ彌陀の淨土へ往生せられたのである。

予は『阿彌陀經』を讀んでその式を終へ、近角常觀師に、『獲信の記』及『歳末の記』を拜讀して頂いた。看護婦は遺骸を淨めて、病用寢車を以て假寓瓜生邸へ移し、頭北面西の古例に倣ふて奥座敷に安置し、紅の絹でふちざられた幅六尺長さ七尺の白絹で之を覆ふた。之は氏が病氣危篤となつて視力も將に絶わやうとする時、此種のハンカチーフばかりは僅かに見る事が出来て淋しく喜んでゐられたからである。時に陰曆二月十五日大聖釋尊入涅槃の聖日であつた。此のしめやかな夜、聖影に向つて靜かに經を誦し、よもすがら故人の生前を語り明かした。

生前の遺言によつて、十九日大學病院で解剖に附し、二十日雨
咽ふ谷中の齋場で奥津城に安んじた。法諱を獲信院釋慈孝とた
へ奉る。

世は澆季と悲しまるゝこと既に久しく、諸善悉く龍宮に入り
給ふて、妻を厭ふ夫、相怨する親子、相鬪ぐ兄弟を以て満され
た家庭をだに怪しまぬ今日、氏の一家のやうに睦び和らぐ家庭
が形造らるゝといふことは、如何に心強い極みであらうか。陽
には譎詐の甘き言葉を囁いて貴い道心を破り、陰には獲利の鋭
い爪牙を磨いて黄白の塊を争奪する世の中に、氏が病床のほと
りのやうな同一念佛の聖園が劃せらるゝといふ事は、如何に尊
い極みであらうか。自の罪業に迎へられ、眷属の悲愁に送られ

須彌にも勝る罪障を負ふて光なき闇黒の旅に出で立つ億々の衆
生の中に、佛の恩顔に迎へられ、故舊の安慰に送られ、滄溟も
たゞならぬ希望を抱いて榮ある光明の旅に出で立つ氏のやう
な人があることは如何に羨むべき極みであらうか。氏がかしげ
て出で立つた信仰の寶冠は實にきらびやかな極みであつた。